

第3回しずおか世界翻訳コンクール

1999-2000, 静岡

The Third
International
Translation Competition
1999- 2000, Shizuoka, Japan

Der 3.
Internationale
Übersetzungswettbewerb
in Shizuoka 1999/2000



翻訳課題図書

Texts for
Translation
Aufgaben
zur Auswahl

第3回しずおか世界翻訳コンクール 応募要項

■翻訳コンクール企画委員

委員長 大岡 信	詩人、文芸評論家、日本芸術院会員
粟津則雄	文芸評論家、フランス文学者
川村二郎	文芸評論家、ドイツ文学者
高橋英夫	文芸評論家、ドイツ文学者、日本芸術院会員
向井 敏	文芸評論家、エッセイスト
山崎正和	劇作家、文芸評論家

■応募手続

1. 資格

国籍、年齢は問いません。ただし、次の人は対象から除きます。

- かつて翻訳書を出版したことのある人
- 共訳(2人以上で翻訳した場合)

2. 応募方法

所定の応募用紙に必要事項を記入のうえ、翻訳原稿と身分を証明する書類を添えて事務局までお申し込みください。
原稿用紙のサイズはA4、縦長、横書、35行、左右1.5cm以上の余白をとってください。なお、作品の返却はいたしません。

3. 応募規定

●翻訳課題図書

次の小説(短編)3篇と評論3篇から、それぞれ1篇ずつを選択する。

小説(短編)

〈図 書 名〉	〈著 者〉	〈出 典〉
「ガッティの背中」	須賀 敦子	『ミラノ 霧の風景』(白水社)
「鍵」	神吉 拓郎	『明日という日』(文藝春秋)
「身毒丸」	折口 信夫	『折口信夫全集第十七巻』(中央公論社)

評論

〈図 書 名〉	〈著 者〉	〈出 典〉
「踏み出しますか」	司馬遼太郎	『春灯雑記』(朝日新聞社)
「江戸人の発想法について」	石 川 淳	『全集 石川淳』(筑摩書房)
「桃太郎の誕生」	柳田 國男	『柳田國男全集』(筑摩書房)

●翻訳言語

英語又はドイツ語(どちらか一言語を選択する)

4. 応募期間

- 2000年12月15日までに下記応募先に到着したものを有効といたします。

■翻訳コンクール審査委員

審査は、下記の審査員により、別に定める審査規定に基づき行なわれます。

委員長 ドナルド キーン	コロンビア大学名誉教授
副委員長 大岡 信	詩人、文芸評論家、日本芸術院会員
ジャニー バイチマン	大東文化大学教授、筑波大学講師
川村二郎	文芸評論家、ドイツ文学者
エドワード クロッペンシュタイン	チューリヒ大学東洋学部日本学科教授

■賞・表彰式

1. 賞(翻訳言語ごとに)

- 最優秀賞/各1名 表彰状、賞金100万円、日本留学助成金(1年間)
- 優 秀 賞/各2名 表彰状、賞金30万円
- 奨 励 賞/各2名 表彰状、賞金10万円

- (1) 各言語の最優秀受賞者には、静岡県内の大学などへ1年間留学してもらうため、日本留学助成金が与えられます。ただし、本コンクールの終了後1年以内に留学できる方に限ります。
- (2) 上記の賞金から日本の税法に基づく税金が差し引かれます。

2. 通知

入賞者には審査終了後、結果を通知いたします。

3. 表彰式

- (1) 表彰式は2001年秋に静岡県内において開催し、各言語の最優秀賞及び優秀賞の受賞者を招待いたします。
- (2) 招待される受賞者は、パスポート、ビザ等を御自身で手配してください。

■その他

1. 主催者はコンクールの円滑な運営を図るため、応募要項の発表後も条項の追加、削除、変更する権利を保有します。
2. 応募要項に明記されていない事項で問題が生じる場合は、主催者の決定に従っていただきます。
3. 本コンクール入賞作品の頒布に関する権利は、本コンクール主催者及び原作者著作権者に帰属します。
4. コンクールの応募規定、または運営上に起こった訴訟に関しては、日本国の法律に従って裁定されます。
5. 本要項は、英語、ドイツ語及び日本語で併刷しますが、翻訳による意味の相違がある場合は日本語版を優先します。

応募先・問い合わせ先

伊豆文学フェスティバル実行委員会事務局

〒420-8601 静岡県静岡市追手町9番6号

静岡県教育委員会文化課

TEL (054) 221-3109 FAX (054) 250-2784

ホームページ <http://www1.sphere.ne.jp/shizuoka>

電子メール shizuoka@po.sphere.ne.jp

小説

「ガッティの背中」

須賀敦子……………1

『ミラノ 霧の風景』白水社

「鍵」

神吉拓郎……………12

『明日という日』文藝春秋

「身毒丸」

折口信夫……………23

『折口信夫全集 第十七卷』

評論

「踏み出しますか」

司馬遼太郎……………34

『春灯雜記』朝日新聞社

「江戸人の發想法について」

石川 淳……………53

『全集 石川淳』筑摩書房

「桃太郎の誕生」

柳田國男……………61

『柳田國男全集』筑摩書房

ガッティの背中

半年に一度、商用で日本にやって来る友人のステファノが、今年の二月に来たとき、開口一番、君に言わなければならな
いことがある、と言った。

「ガッティが死んだ」

また、ひとつ、どこかに暗い穴があいたような気がした。

ガッティにはじめて会ったのは、ジェノワの駅だった。一九六〇年のことである。ローマから汽車で着いた私を、ガッティは友人といっしょに迎えに出てくれていた。その日のことは、あまり覚えてないのだが、どういうわけか、そのとき駅のプラットフォームで撮った彼の写真が残っている。それは上半身をうしろ斜めから撮ってあって、ガッティはくたびれた鳥打帽をかぶっている。びっしりと縮れた長髪が、オーバーについたアストラカンの衿と首すじを覆っていて、なんとなくじむさい。いまでこそレトロなどと言って、ハンティングとか、毛皮の衿とか、そんないでたちもそれほど奇妙ではないだろうが、三十年まえ、その服装はほとんど異様だったし、それが、まだ個人的にはかぞえるほどしかイタリア人を知らなかった私を、ほんの少しとまどわせた。ミラノで出版関係の仕事をしている人だと聞いていたが、それとこの服装があたまのなかでつながらなかった。彼といっしょに駅に出てくれていた友人のほうは、私には「ふつう」とみえたグレイ系のオーバーで、髪も目立つという刈りかたではなかった。それで余計、ひょっとしたらツルゲーネフの親類かも知れないようなガッティのいでたちは印象に残った。

ガッティもその友人も、カトリックの、そのころは左翼と言われた、戦時のレジスタンスの仲間で作った自主グループのメンバーで、ミラノの中心部で小さな書店を営んでいた。その書店の企画会議をジェノワで開くことになり、私はそれに参加させてもらうために、そのころ住んでいたローマから出かけて行ったのだった。ミラノのグループがなぜジェノワで会合

をひらいたのか。それは仲間の中心的存在だったトゥロルド神父が、今日のイタリアでは信じられないことだが、左翼的言動のかどで教会当局によってミラノから追放され、いわば鳥流しになっていたロンドンからイタリアに帰ったのを機会に、ジェノワにあった、ある老婦人の別荘で会議を持つことになったのだ。

その別荘に私は泊めてもらい、ガッティや他の人たちはどこかの安いホテルに泊っているらしかった。そんなことが、なにかはつきりと理解できぬうちに、つぎつぎに決められ、進行してゆくのが、イタリアにいた最初の数年間の自分と周囲のつながりかただったように思う。老婦人はイタリアだけでなく、世界的にも名の知れたミラノの大資本家の一族のひとりで、そんな人の美しい別荘に一介の留学生でしかなかった私が泊めてもらうことの不釣り合にも、それほど仰天しないほど私は若くて世間知らずだった。

何日、ジェノワで過したのかも、よく覚えていない。着いた日はたしか一月二日だった。日本ならお正月なのに、こんな旅行をしている、と思ったので覚えている。どうせ二、三日の滞在だったのだろうが、その一日は、老婦人の運転手つきの車で、ガッティとその友人とトゥロルドと私とで、リヴィエラ海岸のさびれた町にアンジェロ・バリリーという、老詩人を訪ねた。文学史に出ているような詩人の目のまえに自分は立っているという感動と、「太陽の昇る国から来てくれた」という詩人にしてはあまりにも常套的な歓迎の言葉と（詩人でさえ、日本などという彼らの文化の伝統となんの関係もない国のことについては、こんなに勘がくるってしまうのだとは、何年もイタリアにいたあとでわかった）、それから、真冬ということにリヴィエラの太陽があまりまぶしくて、ガッティの友人がずっと頭痛いと言っていた記憶がある。また、これはどういう連想によるのか、ずっとあとになって有名なモンターレの向日葵の詩を読んだとき、その友人の頭痛を思い出してなつかしかった。べつに頭痛のことが書いてあるわけではないのだが、「持ってきておくれ、光にくるった向日葵を」という最後の一行が、あの朝の溢れるような光の記憶を喚びおこしたのだろう。モンターレがこの詩を書いたのも、あのリヴィエラの町から遠くない、おなじ地中海に面したモンテロッソだった。

また、ある夜は、夕食後の時間に、何人かジェノワの友人が老婦人の客間に集まり、そのうちのだれかが自分の詩を朗読してみなが批評したこともあった。その批評があまりよくわからなかったのは、単にイタリア語が未熟だったことよりも、

批評の方法が私にはまったくつかめていなかったからだとは、これもずっとあとになって、わかった。そんな風にいっしょに過ぎた時間のなかのガッティについては、しかし、なにも思い出せない。

ジェノワ訪問の半年あとに、私はローマ暮しを打切って、ミラノに移った。私がコルシア・デイ・セルヴィという、ガッティたちの書店を拠点にして勉強を進めてゆくことに、彼の仲間たちが賛成してくれたからである。それから、私とガッティのながいつきあいはじまった。

コルシア・デイ・セルヴィ書店との出会いは、それについて一冊の本が書いてしまうほど、私のミラノ生活にとって重要な事件だったのであるが、ここでは私がガッティとかかわった場としてだけ話すことにする。この書店の名は、現在ヴィットリオ・エマヌエーレ通りと呼ばれるミラノの目抜き通りが、昔はコルシア・デイ・セルヴィ（セルヴィ修道院まへの馬車道）と呼ばれていたことに由来する。ヴィットリオ・エマヌエーレというサヴォイア王家出身のイタリア王の名は、当然、イタリア統一後につけられたもので、この名の由来をたずねられると、店の人たちが誇らしげに、マンゾーニの『いいなづけ』にも出ています、と答えるのを、私は何度も耳にした。アレックスサンドロ・マンゾーニは一九世紀の国民的作家で、彼の書いた『いいなづけ』は、イタリアで中等以上の教育を受けたものならだれでも学校で読まされた本だから、そう言われるとみんな、へえという感じで頭を掻いたりした。書店の建物というのだろうか、店が巣くっていた場所は、セルヴィ修道会の管轄になるサンカルロ教会のいわば脇の通路とでもいうのか、細長い、まさにうなぎの寝床のような空間で、書店の仲間たちはその物置にあてられていた場所を借りて店をはじめたのだった。書籍の販売は書店だから当然だが、その他にもコルシア・デイ・セルヴィ書店は、主にフランス語から訳した「進歩的」といわれる神学書の出版・販売を手がける一方、実に多くの友人、顧客を抱えていて、その人たちのたまり場にもなっていた。夕方から閉店の七時半ごろにかけてが、仕事を終えて家に帰るまえのひと時に寄る客で書店がもっとも賑わう時間で、詩人や小説家、大学人や評論家、政治家、宗教家が、学生や運動家にまじって熱のこもった議論をたたかわすサロンの様相を呈することもしばしばであった。

ガッティは当時、コムニタ出版社の編集スタッフだった。コムニタというのは共同体という意味で、日本ではタイプライターで知られるオリヴェッティ社に、「善玉の資本主義」などとよく呼ばれる経営哲学を導入し、この会社で今日の個性的な全体像をあたえた天才的リーダー、アドリアーノ・オリヴェッティが、その思想をより普遍的なレベルで探求するために設立した出版社である。したがって、ガッティがコルシア・デイ・セルヴィ書店に来るのは、出勤まえと退社後の時間で、いわばボランティアのかたちで、書店の仕事を手伝っていたのだった。書店のやたらと細長い建物のどんづまりに彼のうす暗いオフィスがあつて、そこに行くとガッティはいつも、あの胸のすくように刃のながい編集用の鋏と糊をつかつて、切ったり貼ったりするレイアウトの仕事をしていた。道端にしゃがんで畳屋さんの仕事を見つめる子供のように、私はガッティの手もとをただ感心して目で追っていた。

二十ワットか、せいぜい三十ワットくらいの黄色い電球の光の下で編集をしているガッティは、ときには私に仕事を手伝わせてくれることがあつた。あたらしい本を作るとき、ガッティは私を紙問屋や印刷工場や、はては格安で美しい製本をする、ミラノ郊外の修道院にまで連れて行ってくれた。中央駅から一時間ほど電車に乗って、ながい田舎道を歩いて行ったところにあるその修道院に着くと、手編みのレースのカーテンがかかった小さな客間に通され、おっとりとした中年の修道女が、トスカーナなまりのあかるい声で、修道院の経営する印刷工場ではたらく修道女たちの苦労話をガッティに話すのを、私は黙ってそばで聞いていた。またガッティは、あの忍耐ぶかい、ゆっくりした語調で、原稿の校正の手順や、レイアウトのこつを教えてくれることもあつた。すこしふやけたような、あおじろい、指先の平べったいガッティの手が、編集用の黒い金属のものさしで行間の寸法を計ったり、紙の角を折ったりするのを、私は吸いこまれるように眺めていた。全体のじむさい感じとは対照的に、よく手入れされた神経質な手だった。

ガッティの長髪がアドリアーノ・オリヴェッティの真似であることに気がついたのは、アドリアーノが死んだときだった。彼の写真を新聞で見て、そのことに気づいた私は、それまで知らなかったガッティの一面を見る思いだった。アドリアーノの死を私に伝えてくれたのはもちろんガッティだったが、そのときの彼の声はなにか唐突な、それでいて思いつめたような調子があつた（いま、日付を繰ってみると、アドリアーノは一九七〇年の二月に死んでいる。私がちょうど、川端康成の『山

の音』を訳していたところで、ガッティはその本の完成を楽しみに待っていた。生前のアドリアーノと彼はどれほどの面識があったのだろうか。それでも、彼は優しさをこめて、アドリアーノという名を発音した。自分の勤めている出版社の創立者の名を、親しい友人かなにかのように呼びすてにすること自体が、私には意外で新鮮だったが、それは後にコムニタの社員だけでなく、オリヴェッティ社の人たち一般の慣習だったとわかった。ガッティは、アドリアーノが死んだからもう出版社コムニタもどうなるかわからない、といま考えるといかにも彼らしい、ペシミスティックで前近代的な意見を、ほんとうに淋しそうに言った（あれから十八年経ったが、今日コムニタはいよいよ健在である）。

ガッティをコムニタの編集室にはじめて訪ねたのもそのころだったと記憶している。それは、やはりミラノの都心、ドゥオモに近い、アレッサンドロ・マンゾーニ街の、たしか十二番地、ボルディ・ペッツォーリ美術館とおなじ建物の中にあつて、彼の職場は、ここでもうす暗い、どこを見ても紙だらけの大部屋だった。ひどく天井が低かったような記憶があるのはどういうことだったのか。道路に面した大扉を入れて左側が美術館の入口、右側の階段を上ってゆくと、コムニタの扉があった。私の訪ねた時間が変則的だったのか、休日でもあったのか、その中でガッティ以外の人に会った記憶はまったくない。なんの用で訪ねて行ったのかも憶えていない。しかし、もうアドリアーノがいなくなったから、というようなガッティの言葉を、人気がない編集室でもう一度聞いたのを、鼻にかかった彼の声とともにはっきり憶えている。

アドリアーノが死んだのと、しかし、ガッティの精神があのはてしない坂道を、はじめはゆっくり、やがては加速度的に下降しはじめたのと、ほとんどおなじころだった。ガッティの仕事がはかどらないと、書店の友人たちが問題にするようになったのは、その二年ばかりまえ、ガッティのお母さんが亡くなった数ヵ月後のことだった。書店版の翻訳書の目録も、ある番号で停止したままで、新刊が出なくなった。それは、戦後二十代だった若者が、カトリシズムを普遍的な目で捉えなおそうという目的ではじめた彼らの運動よりも、社会の変革の歩幅のほうが大きくて、書店の友人たちが一瞬目標を失ったかにみえたころのことだった。はじめての日にジェノワの駅にガッティと迎えに来てくれた友人で私の夫になったペッピーノが、六七年に四十一歳で急逝して、ガッティは有力な代弁者をうしない、そのこともガッティの立場をわるくしてしまった。その頃、書店のほうは、商売として立派にやってゆけるまでに成長していたが、ガッティは出版部門だけを受け持っていて、

その責任者本人がスランプに陥って仕事をしなくなったのだから、出版部門は当然、開店休業のていであつた。

ガッティがもうコムニタに行かなくなったのも、そのころだったと思う。彼は一時期フェックロという小さな出版社に勤めていた。たしかミラノ近辺の絹織物かなにかで財を為した実業家がはじめた出版社で、ガッティは結構いろいろとまかされていたらしく、機嫌もよかつたし、私にまで仕事をまわしてくれるようになった。フェックロの仕事がいそがしいのであれば、彼にとってはいわばボランティアのかたちで協力していたコルシア・デイ・セルヴィ書店の出版部が停滯しても、これはだれもなにも言える立場ではなかつた。フェックロの社長だか編集部長だか、無智で没趣味で大声のズングリ（と私が彼の時から想像した）男が当面のガッティの敵で、編集の仕事の合間々々には、ねちねちと喧嘩しているらしかった。そんな喧嘩がだんだん実りをみせてきて、ガッティはフェックロをやめると言い出した。それまで私はガッティの個人生活に干渉するどころか、ほとんどかわつたことがなかつたのだが、フェックロを退社すると彼が言い出したときばかりは、なにか不吉な予感がして、むきになってとめたのを思い出す。初夏のある昼下がり、どうしてあんなところにいたのか覚えていないが、スカラ座の横のヴェルディ街で、「だめよ、ガッティ、フェックロをやめたら、どこに行くのよ。あてもないのにやめるなんて、乱暴よ」と夢中で話している自分の声がいまでも聞こえるようだ。「給料とりじゃない君にはわからないよ」というのが、ガッティのかたくなで悲しげな返事だつた。

「だいじょうぶだよ。こっちからやめたら、失業保険がとれない。どうにかして、やめさせられるように、努力するよ」ガッティの努力が実つたのかどうか、それからしばらくして、ガッティはまた、あのコルシア・デイ・セルヴィのうす暗い編集室にすわっていることが多くなつた。ただ以前と違つたのは、そこで書店の仕事をしているよりも、なにかアルバイトのレイアウトや編集をそこに持ち込んでいたようだった。書店の出版部門はいかかわらず開店休業の状態がつづいていた。

さて、ガッティ、ガッティと書いてきたが、ガッティというのは実は姓で、彼の名はデジデリオだつた。これは紀元八世紀に生きたロンバルディア王国最後の王の名だが、この人物はアレクサンドロ・マンゾーニの悲劇『アデルキ』の主人公の父親でもある。シャルルマーニュ大帝に屈するよりは死を選んだ英雄の物語『アデルキ』は、さきにも挙げた同じ作者の『い

いなづけ』や、ヴェルディの歌劇『ナブッコ』などと共に、イタリア統一運動の精神的な支えとなった作品である。社会主義者で統一運動の熱烈な信奉者だったガッティのお父さんの命名だったのか、やはり社会主義だったお母さんがつけた名なのか、どちらにしてもこの名には、古いロンバルディア王国と、ロンバルディアが生んだイタリアの文豪マンゾーニへの熱い思いがこめられていたように思う。ずっとあとになってから、ガッティにルイージという平凡なミドル・ネームがあつて、家ではその名で呼ばれていたことが判明したが、それでも彼は友人にはデジデリオと呼んでくれと言い、彼がひとかたならずこの名にこだわっていることがわかった。しかし、彼自身の希望とはうらはらに、友人たちにとって、この時代がかった、しかも現代イタリア語では、欲、それも情欲など肉体的な欲を連想させるこの名がうっとうしくて、自然、親しくなっても慣習に反して、ガッティと姓で呼ばれていたのである。

ガッティの両親が社会主義者だと言ったが、お父さんは若いころ、すなわち一九二〇年代に映画を作っていた、とガッティから聞いたことがある。当時ではずいぶんハイカラな仕事をしていたとガッティは自慢していた。小学校の先生だったお母さんは、たしかお父さんより二十歳年上だったとも、ガッティが話してくれた。ガッティはお母さんが四十歳のときに生まれたのだった。ガッティの家にはそのお母さんが、長年勤めた小学校をやめるときにもらったという、小さな木の椅子があつた。が、私が結婚したとき、お祝いと言って、その椅子とそっくりおなじものをガッティは親しい大工さんに作らせてくれた。

ガッティの親しい友人に、当時ある都市銀行の頭取をしていた人がいた。才気煥発という言葉がそのまま歩いているような人物で、経営の手腕はもとより、新しい支店をひらくたびに、その建築をつぎつぎと著名なデザイナーに注文することで、ミラノでは評判の高い人だった。彼には女一人、男二人の子供がいて、とくに男の子たちが、ガッティをひどく尊敬していた。その銀行家の家に私たち書店の仲間はよく招待されて、夕食後の時間をおしゃべりで過ごすことがあつた。そんなある夜、音楽の話が出た。銀行家のアンジェロ氏は、大のバッハ好きだった。長女のところに生まれた二人の係にジョヴァンニ（ヨハン）とセバスティアノ（セバスチャン）という名をつけ、三人目が男の子だったら、バッハだ、とみなでよく笑つたものだ。その日はだれが言い出したのか、ガッティが音楽に関しては鼻もちならぬスノッブだということになった。ガッ

ティの大学の卒論のテーマはアルビノーニで、このヴェネツィアの作曲家の名がほとんど素人に知られていなかった当時、わざわざそんなややこしい作曲家について論文を書くガッティが我慢できない、とみなが彼をからかったのだった。そのあと、ずいぶん長いこと、何人かの友人は「われらのアルビノーニ」とガッティのことを呼んでいた。やはりそのころ、私がムスタキというフランスのシンガー・ソング・ライターの歌が好きだと言うと、ガッティは困ったような顔をして、あんなやつを君が好きだなんて、そんなはずはないよ、君は歌詞と音楽を混同しているんだ、ムスタキの歌詞はいいけど、音楽は耐えられない、となぜかむきになり、このほうがいいと言って、レナード・ゴーエンのレコードをくれた。そういえば、あれから二十年、ムスタキはほとんどわさにのぼらなくなったけれど、レナード・ゴーエンの名はいまでもときどき何かに出ている（エディット・ピアフの愛人だったと言われるムスタキはまだ生きているのだろうか）。

銀行家とガッティの関係は戦時中のレジスタンスにさかのぼり、仲間どうしで非合法パンフレットを印刷していたと聞いたことがある。年齢から考えると、ガッティはまだ高校生ぐらいの年頃だったのではないだろうか（ほんとうを言うと、ガッティの年齢は、私たち仲間のミステリーのひとつだったが、彼がわざと秘密にしていたのではないようにも思う。かなり私たちよりはずっと年長だという神話のようなものがあって、そのためこちらが面映ゆくて、聞きそびれたのである）。そんな若者がやはりレジスタンスに参加していたのだろうか。それは銀行家の長男のパスクアーレが生まれてまもないころで、そのグループの非合法印刷物をパスクアーレの乳母車にぎっしりつめて、その上に赤ん坊をのせて、目的地に運んだという話を何度か聞いた。そのパスクアーレが大学時代、学生運動の波に巻きこまれて、勉強を放棄しそうになったことがあった。そのころ、彼はガッティ以外のおとなには近づかなくなり、両親はガッティを通して息子の消息を得ていた。次男で末っ子のベネデットは、長いことコルシア・デイ・セルヴィ書店の最年少の顧客として、みなにかわいがられていた。彼が連れて来られるようになって、書店に子供の本を置くことになったのだそうだ。でもベネデットはまたたく間に子供の本を卒業してしまっ、ちっばけな小学生のころから、社会学や心理学の問題をガッティにたずねては、ガッティを半分よろこばせ、半心配させていた。

フェット出版社をやめてからのガッティは、いわゆる正業はなくなって、いろいろな外注の仕事で生活していたらしかっ

た。彼は以前にもまして気むずかしくなり、友人たちも彼を避けるようになった。それでも、私が七一年にミラノの生活に終止符をうって日本に帰ろうと決めたとき、ガッティはあるフィレンツェの大手出版社のミラノ支店の編集部員になっていた。編集部といっても、たいした仕事があるわけではなく、名刺の肩書以外、これといったおもしろみのない職場のようだった。それでも、今度は死んでもはなさない、と彼は気弱に笑いながら言っていた。

日本に引きあがることになったある日、私はガッティの家をなにかの用で訪ねた。まだ翻訳やら、書評やらの仕事が残っていて、私は夜もろくろく寝ていない日が多かった。ガッティはなにやら、校正のような仕事をしていたので、私は区切りのよいところまで待つあいだ、ソファで新聞を読んでいた。そのうち、まったく不覚にも、私は眠りこんでしまった。いたい、どれくらい寝たのだろうか。ふと気がつくと、ガッティが仕事机から、ちょっと困ったような、しかしそれよりも深い満足感にあふれたような表情でこっちを見ていた。ごめん、ガッティ、疲れていたものだから。そう謝りながら、私はガッティのあたたかさを身にしみて感じ、それとともに、もうこんな友人は二度とできないだろうと思った。

日本に帰った私に、ガッティは次々と新聞の切抜きを送ってくれた。それは文芸批評であったり、宗教論争であったり、ときには漫画の切抜きだったりした。二年、あるいは三年に一度、私がミラノに帰るたびに、ガッティは、しかし、おどろくほど老けこみ、愚痴っぽく、疑い深くなっていた。もともと愚痴の多い人だったが、年とともに、ガッティの周囲は敵ばかりかと思うほど、彼はみんなを怖がり、私にも誰彼に注意するようにと繰り返しかえした。何人かの古い友人が口をそろえて、才気にあふれた、冗談好きな昔のガッティはもういなくなった、と悲しんでいた。例のフィレンツェの出版社の仕事はそれでもほそぼそとつづいている様子だった。

ある年のこと、イタリアで夏を過して日本に帰って来ると、ミラノから手紙がとどいていた。その年はずっとフィレンツェにいたので、ミラノを素通りして日本に帰ってしまったのだった。手紙はコルシア・デイ・セルヴィ書店の友人のひとりからで、ガッティがとうとうわけがわからなくなって、ひとりで暮らせなくなり、病院に入るようになった。病名はアルツハイマー症候群とやらで、よくなる希望はないらしい。昔の友人が何人か集まって世話をすることになった。いま、彼を受

け入れてくれる病院をさがしている。究極的には、彼の年金ですべてまかなえるはずだが、それがおりるまで、財政面は友人たちで面倒をみる。君もよかったら、参加しないか、というすじあいの手紙だった。

実をいうとその年、イタリアに行くまえに、私は二度、ガッティから手紙をもらっていた。どちらも、ひどくふるえた手で、便箋というよりは、くしゃくしゃの紙切れに書いた電報のような手紙で、ひとつには、「日本の木靴（ツルク）おくれ」、もうひとつには「大豆のソースを一リットルたのむ」とだけあった。いやだなあ、ガッティは老練したのかしらとは思ったが、それ以上深く考えもせずに、私は大きなサイズの男下駄を一足と、缶入りの醤油一リットル送ったところだった。友人の手紙を読んで、私は胸をつかれた。時間がなかったというのは言い訳にすぎず、老練したガッティに会いたくなかったから、私はミラノに寄る時間をつくらなかったのだった。手紙にはまた、そんなガッティを親身に診てくれているのは、今は著名な神経科の医師になっている、あの銀行家の次男坊で、昔ガッティにかわいがられたベネデットだとあった。

その翌年、ふたたびイタリアに旅行した機会に、私はガッティの病気を知らせてくれた友人に連絡をとった。ガッティはミラノの南、三十キロほどのところにあるクレーマという町の、老人ホームのようなところの世話になっているということだった。ガッティに会いたい、と私は友人に頼んで、ある一日、クレーマに連れて行ってもらった。彼の運転する、すばらしく乗り心地のよい赤いアルファ・スッドが、精神を病むガッティのところに行く私の気持とは、なにかひどくちぐはぐだった。

ホームの待合室のようなところに、男の看護人に付添われて出てきたガッティは、思いがけなくさっぱりとした顔をしていた。年齢を跳びこえてしまった、それは不思議なあかるさに満ちた顔だった。私の知っていた、どこかおずおずとしたところのある、憂鬱な彼の表情はもうどこにもなかった。山ほど笑い話の蓄えをもっていて、みんなを楽しませてくれたガッティも、もちろんアルビノーニのガッティも、その表情のどこにも読みとれなかった。私を案内してくれた友人が次々とポケットから出すキャンディーを、ガッティはひとつひとつ、それだけは昔と変わらない、平べったい指先で大事そうに紙をむきながら、うれしそうに口にはうばり、なんの曇りもない、淡い灰色の目でじっと私を見つめた。ムスタキのかわりにレナード・コーエンをくれたガッティ、夫を亡くして現実を直視できなくなっていた私を、睡眠薬をのむよりは、喪失の時間

を人間らしく誠実に悲しんで生きるべきだ、と私をきつくいましめたガッティは、もうそこにいなかった。彼のはてしないあかるさに、もはや私をいらいらさせないガッティに、私はうちのめされた。

まもなく夕食の時間がきて、ふたたび看護人がガッティを迎えに来た。チャオ、ガッティ、という私たちのほうを振り向きもしないで、ガッティは食堂に入ると、向うをむいたまま、スープの入った鉢をしっかりと片手でおさえて、スプーンを口に運びはじめた。

幼稚園の子供のような真剣さが、その背中ぜんたいににじみでていた。

鍵

機械部の部長の古屋は、大柄な男である。

大きい癖に、猫背で、ひとと話すときは、いっそう背中を丸める。そして、意外なほど柔かな声で、囁くように話し掛ける。

その古屋が、昼すこし前に、佐藤のいる部屋を覗いた。

佐藤は総務部の部長である。

古屋は、佐藤のデスクの横へ来ると、

「あのな」

と、例の柔かな声で呼び掛けた。

「なんだい」

「昼めし、つき合ってくれないか。ちょっと話があるんだ」

「ああ、いいよ。どこにする」

「まかせてくれ。新しく見つけた家があるんだ」

「ふうん。じゃ、まかせる」

「それじゃ、あとで」

気心の知れた仲である。

それだけいって、古屋は部屋を出て行った。

丁度いい、と佐藤は思った。

多分、高島のことだろう、と、見当がついた。

忙しさにまぎれて、聞いていなかったが、その後、高島の様子がどうなっているのか、古屋に聞いてみたいと考えていたところである。高島が倒れてから、ずっと、病院や留守宅の面倒をみているのは古屋なので、他の誰よりも事情をよく知っている。

高島が突然倒れてから、もう半年近くになっていた。彼は機械部で古屋の下次長、古屋も高島も佐藤も、同じ年に入社した仲間であった。

高島は、その日たまたま出掛けたゴルフ場で具合が悪くなった。

すぐに最寄りの医院に運ばれたが、そこではあまり適切な処置は受けられなかったようである。

症状からすると、蜘蛛膜下出血だろうということだったが、その日は土曜日で、なにごとく手筈がつき難かった。設備の整った病院に移されたのは、なお一日おいた月曜日である。ずっと意識を失った状態のままであった。

「運が悪かったよねえ。せめて月曜日に、会社で倒れてくれりゃ……」

古屋は、手当の立ち遅れを、そういう風に歎いた。佐藤も同じような思いであった。それでどうなるということはないだろうが、自分たちが居合せれば、なにかが出来たのに、と思いたかったのである。

古屋は、病院や留守宅にせっせと足を運び、家族の相談にも乗り、まめに雑事を処理した。直属の上司ということもあったが、大きな身体をした彼は、高島の家族にとって見た目にも頼もしく頼り甲斐のある存在として映っただろう。

佐藤は、古屋の面倒見のよさに感心した。入社当時の仲で、気のやさしい男だとは思っていたが、あらためて、その上に、厚みを増した年輪を感じた。ふだんは見過して、或る日、その樹の幹の太くなったことに驚くようなものである。仕事の面でも、高島が抜けて、その分をかぶっている筈だが、別にこぼしもせず、淡々とやっているし、自分の家族のほかにも、もう一つ家族を抱えこんでしまったような状態なのに、気負ったところも見せない。

「なにか、出来ることがあったら、遠慮なくいって下さい。まあ、古屋君がよくやってくれてるようだから……」

古屋ほどではなくても、佐藤も何度か病院へ足を運んでいる。

付き添っている高島の細君に、そういうと、彼女は、本当に古屋さんにはなにからなにまで……、と、声をつまらせて、

ベッドの病人の方へ目をそらせた。

高島は、依然として、意識不明のままである。人相が変わって、見馴れた高島とは別人のように見える。佐藤は、しばらくその顔を眺めていた。最後に話したときは、彼となにを喋ったのだろうと記憶を辿ってみたが、結局なにも思い出せなかった。

「おれがいうのも、へんかもしれないがね。有難う」

女中が、註文を聞いて去るのを待って佐藤はまず古屋に頭を下げた。

古屋は、怪訝な顔をした。

「高島のことだよ」

「ああ……」

古屋は頷いた。

そして、ちよつといい淀んだが、

「あすは我が身、って気がするんでね」

といって、佐藤の目のなかをのぞいた。

今度は、佐藤が頷く番だった。

「それに違いない。……たまたまあいつの方が、順番が先になったんだ」

「そういうことだと思うよ」

古屋は肩を落していった。

「……しかし、こういう場合に出来ることといったら、後手後手に廻るしかないんだね」

「そうだな」

「倒れる前になんとか出来たら、と思うと、口惜しいよ」

古屋のいう通りだった。

「それで、見込みはあるのか」

「医者は手術をするといってる。それが成功しても、植物人間だろうね」

佐藤は溜息をついた。

「それ以上の可能性はないのかね」

「まず駄目らしい。接触の悪い蛍光灯みたいなもので、繰り返してスイッチを入れてると、たまにふっと点くことがあっても、また断^きれてしまう。素人考えだけれど、そんなものらしい。手術するのは、ぱちぱちスイッチを入れてみるようなものじゃないかね」

「そういうものかな。……命はどうなんだ」

「生かしておくことは出来るらしい。でも、半年か、一年か、もっと生きるか、その辺はまだ解らないそうだ」

「暗然とするなあ。……奥さんはどうだ」

「しっかりしてる。覚悟はしてるようだ。しかし、今はまだ気が張っていても、長くなると大変だ」

「君の部も大変だな」

「仕事の方は、なんとかなる。それよりも、目下のところ、問題はこれだよ」

「金か」

「入院費、手術代、生活費、いくらあったって足りやしない。それで今、会社と掛け合ってるんだがね。正直いって頭痛い」

「渋いのか」

「いや、なんとか一番高いところへ釣り上げようと思ってるのさ。それで知恵を絞ってるところなんだ」

古屋は、そこで、なにかを思い出したらしい。ああ、と呟いて、上着のポケットを探ると、小さなものをつまみ出した。

「これなんだがね。何の鍵だが解るかい」

受け取って、佐藤はその鍵を調べてみた。小型で、なにかの符号らしい英字と数字が刻んである。

「なんだい、これは……」

「高島の机を整理してたら出て来たんだがね」

「ほう。いつやったんだ」

「つい一週間ばかり前に、奥さんの了承を貰って、俺がやった。なんだか厭な気分だったけどね」

「ふうん」

佐藤は、なんとなく解るような気がした。

「なにか出たかい」

古屋は、首を振った。

「いや、なにも……。奥さんに見せない方がいいと思うものも、二三あったがね。それは始末した。机もロッカーも整理して、結構時間が掛ったよ。翌日、奥さんに私物だけは届けたんだが……」

「そりゃ、よかった」

「ところがね。この鍵だけが宙ぶらりんになってしまった」

「ほう、奥さんにも心当りがないのかい」

「そうなんだ」

「ふうん、……なにか曰くがありそうだな」

「おれも咄嗟にそう思った。それで、出どころが解ったようなふりをして、持って来ちゃったんだけど……、これは何の鍵だと思うね」

「さあ、おれにも解らん。ロッカーの鍵でもないし、ファイル・キャビネットの鍵でもないな」

「そうだろう」

「庶務か、守衛室あたりに聞いてみたら」

「当ってみたよ」

古屋は、指の節で、こつこつと額を叩いた。

「……この種の鍵は、社内では使われておりません、といわれた」

「とすりゃ、ゴルフ場か」

「ゴルフ場で鍵を使うのは、ロッカーぐらいだろう。それも当ってみるか」

「しかし、ロッカーの鍵って感じじゃないね。たとえばだな、会員制クラブの鍵で、これが会員証代りになってるとか……」

「……でも、妙だな」

佐藤は、ふと思ひ当るところがあつて、古屋を見つめた。

「……どうして、小さな鍵ひとつに、そう拘^{こたわ}るんだい。なにか、訳ありなのか」

古屋は頷いた。

「引き出しの奥の、蔭になつてるところに、テープで留めてあつたんだ。なんでもない鍵なら、そんな風に隠しておいたりしないだろう」

「ほう」

佐藤は、そこで、もう一度その鍵を見直した。なんの変哲^{へんてつ}もない、小さな鍵である。まだ使い古していない証拠に、つまみ上げると、きらりと光った。

高島が倒れたことは、佐藤にとってやはり大きなショックだった。同年輩でもあるし、高島を見舞つたと同じ災厄が、佐藤の身の上に対しても、なんの不思議もないのである。

明日は我が身、と、古屋がいった言葉は、以前の佐藤たちにとっては、冗談めいた使われ方をされていた筈であつた。それが、こうまで切実になつて来ると、佐藤も動揺しない訳にいなかった。

「どうしたのよ、佐藤さん、この頃、影うすくなったみたい」

飲んでいて、突然耳もとでそんな声が聞えてびっくりすることもあった。いつの間にか自分だけの妄想の世界に迷い込んでいて、周囲のことは見えなくなってしまう。

「やあねえ、ほんとに影うすいよ」

「そうか、おれ、電池が切れかかってるのかな」

「そうよ、充電じゅうでん、充電、ちょっと、こちら、お代り……」

佐藤は、思いついて、その店の女たちに聞いてみた。

「これこれこういう訳でさ。或る会社の、或る男の机の引き出しから、素姓の知らない鍵が出て来たとするね。隠してあったその鍵は、何の鍵だと思う」

それに対する反応は、さまざまだった。

「これよ」

と、小指を立ててみせて、

「絶対間違いなあし、女のマンションの鍵」

と断定する女もいたし、

「実物見れば解るんだけどなあ。私、何十回と引越ししてるから、いろんな種類のマンション知ってるのよ。ひと目見りゃ、ばっちり解るわよ」

という女もいた。

「しかし、マンションの鍵にしちゃ、ちょっと違うような気がするなあ。こんなもんなんだぜ」

と、佐藤が反論すると、

「そういうのもあるのよ」

と、引越し数十回が、自信ありげにいう。

「きっと、私書箱の鍵じゃない。今流行^{はや}ってるのよ」

「私書箱は、めいめいに合鍵を持たせるのかい」

「さあ、よく知らないけど、……じゃ、銀行の貸金庫か、ホテルのセーフティー・ボックスかな」と、思いつきばかり並べる女もいた。

「結局、女の線かね」

「もちろんよ」

「そうかなあ……」

「あら、佐藤ちゃんがよく知ってる人なの」

「いや、そうじゃない」

佐藤は打ち消した。

「女の部屋の鍵だとすると、その女はどうしてるだろうね。今まで足しげく来ていた男が、ふつつりと姿を見せなくなったら……」

「その一、次なる男を探す」

「それとなく会社で電話を掛けて、様子を聞くだろうな」

「〇〇は只今欠勤して居ります」

「初めは、居留守かもしれないと思うかな」

「二三日して、また掛けてみる」

「〇〇は只今欠勤して居ります」

「いよいよこれは病気かもしれないと思う」

「私は深追いしないほうだもんね」

「由美は、追われもしないほうだからね」

「ちょっと、今、なんていった」

女たちがはしゃいでいる横で、佐藤は、気持が沈んで来るのを感じていた。

病床にいる高島には、ときどき、意識が戻ることがあるようだった。

或る夕方、付き添っていた細君は、帰り支度をして、高島の耳もとに口を寄せて、

「それじゃ、帰ります」

とささやいた。聞えなくても話し掛けよう、彼女は、そう決めて、入院以来、ずっとその習慣を続けていた。

その夕方、声を掛けると、高島の顔に、ほんの僅かな反応があった。閉じられた目蓋が、かすかに動き、涙が溢れて、ひと筋、頬を伝った。それを見て、細君は号泣したそうである。

一回目の手術で、いくらか上向きになりかけた病状も、続いて行われた二回目の手術の結果、また、元へ戻ってしまった。一進一退で、次第に悪くなるだろう、という医師の予測が、不幸にも当たってしまったようだった。

見舞いに行つて、ただ昏々と睡っているだけの高島の顔を見ると、佐藤は、不思議な感慨に囚われてしまう。これが、かつて一緒に入社し、共に仕事をし、連れ立って飲み廻った仲間だろうかと思う。揺り起して、自分がここに居ることを知らせてやりたくなる。

高島の細君は、つとめて明るく振舞っているが、やはり疲れは隠せない。話すこともつい途切れがちになる。

古屋は、会社のなかのあちこちに働き掛けて、高島の家族の為に、なんとか有利なかたちを造ろうと奔走していた。ときには佐藤も助太刀に出ることがあった。

或る日、佐藤のところに電話が掛けて来て、受話器を取ると、古屋からであった。

「おい、喜んでくれ、なんとかなったよ」

古屋は、そういった。

それだけで、なんのことか佐藤にはよく解った。

その晩、二人は落ち合って、ささやかに祝杯を挙げることにした。

古屋の話によると、かなりの額の保険金かはやばと支払われることになったし、会社の方も、出来るだけの処置をしてくれることになったようである。

「これで、もしものことになっても、まず心配はいらないだろう。おれもやっと安心して眠れるよ」

古屋は満足げだった。大きな身体がひと廻り縮んだように見えたが、それは、続いた心労のせいなのだろう。

「一度に二つ三つ年を取ったような気がするよ」

古屋は、そう弱音を吐いたが、表情は晴れ晴れとしていた。

「ところで、あの鍵はどうした」

佐藤が気にしていたことを聞くと、古屋はポケットを探って、ほかの鍵と一緒にキイリングにつけた例の鍵を出して見せた。

「で、何の鍵か、正体が解ったのか」

「結局、解らん。解らずじまいだ」

古屋は、しばらくその鍵を眺めていたが、

「この鍵は、おれが貰ったことにはしたよ。いいかい」

「もちろんさ。それがいちばんだ。なにか幸運でも持ってきてくれるかもしれない」

「そうだいいが」

古屋は、もう一度、その鍵をじっと見ていたが、やがて、しっかりとポケットに納めた。

その鍵は、それ以後も、ずっと、古屋のポケットのなかにある。

行き場のない鍵というのは、奇妙なものだ。

どこかで、なにかが、開けられるときを待っている筈なのに……。

鍵は知っているのに、語ってくれない。

もう一人、それを知っている高島も、口を噤^{つぐ}んだまま、語ろうとはしない。

身毒丸

身毒丸の父親は、住吉から出た田楽師であつた。けれども、今は居ない。身毒はをり／＼その父親に訣れた時の容子を思ひ浮べて見る。身毒はその時九つであつた。

住吉の御田植神事の外は旅まはりで一年中の生計を立てゝ行く田楽法師の子どもは、よた／＼と一人あるきの出来る頃から、もう二里三里の遠出をさせられて、九つの年には、父親らの一行と大和を越えて、伊賀伊勢かけて、田植能の興行に伴はれた。信吉法師というた彼の父は、配下に十五六人の田楽法師を使うてゐた。朝間、馬などに乗らない時は、疲れると屢若い能芸人の背に寝入つた。さうして交る番に皆の背から背へ移つて行つた。時をり、うす目をあけて処々の山や川の景色を眺めてゐた。ある処では青草山を点綴して、躑躅の花が燃えてゐた。ある処は、広い河原に幾筋となく水が分れて、名も知らぬ鳥が無数に飛んでゐたりした。さういふ景色と一つに、模糊とした羅衣うすぎをかついた記憶のうちに、父の姿の見えなくなつた、夜の有様も交つてゐた。

その晩は、更けて月が上つた。身毒は夜中にふと目を醒ました。見ると、信吉法師が彼の肩を持つて、揺ぶつてゐたのである。

「おまへにはまだ分るまいがね」といふ言葉を前提に、彼れこれ小半時も、頑是のない耳を相手に、滞り勝ちな涙声で話してゐたが、大抵は覚えてゐない。此頃になつて、それは、遠い昔の夢の断れ片はれの様にも思はれ出した。唯この前提が、その時、少しばかり目醒めかけてゐた反抗心を唆つたので、はつきりと頭に印せられたのである。

その時五十を少し出てゐた父親の顔には、二月ほど前から気味わるいむくみが来てゐた。父親が姿を匿す前の晩に着いた、奈良はづれの宿院の風呂の上り場で見た、父の背を今でも覚えてゐる。蝦蟇の肌のやうな、斑点が、膨れた皮膚に隙間なく現れてゐた。

「とうちやんこれは何うしたの」と咎めた彼の顔を見て、返事もしないで面を曇らしたまゝ、急に着物をひつ被つた。記

憶を手繰つて行くと、悲しいその夜に、父の語つた言葉がまた胸に浮ぶ。

父及び身毒の身には、先祖から持ち伝へた病氣がある。その為に父は得度して、淨い生活をしようとしたのが、ある女の為に墮ちて、田舎聖の田樂法師の仲間に投じた。父の居つた寺は、どうやら書写山であつたやうな氣がする。それだから、身毒も法師になつて、淨い生活を送れというたやうに、稍世間の見え出した此頃の頭には、綜合して考へ出した。唯、からだを淨く保つことが、父の罪滅しだといふ意味であつたか、血縁の間にしふねく根を張つたこの病ひを、一代きりにたやす所いだというたのか、どちらへでも朧氣な記憶は心のまゝに傾いた。

身毒は、住吉の神宮寺に附屬してゐる田樂法師の瓜生野といふ座に養はれた子方で、遠里小野の部領の家に寝起きした。

この仲間では、十一二になると、用捨なくごし／＼と髪を剃つて、白い衣に腰衣を着けさせられた。ところが身毒ひとりとは、此年十七になるまで、剃らずにゐた。身毒は、細面に、女のやうな柔らかな眉で、口は少し大きい、赤い唇から漏れる齒は、貝殻のやうに美しかつた。額ぎはからもみ上げへかけての具合、剃り毀つには堪へられない程の愛着が、師匠源内法師の胸にあつた。今年は、今年とは思ひながら、一年延しにしてゐた。そして、毎年行く国々の人々から唯一人なる、この美しい若衆はもて囃されてゐた。牛若というたのは、こんな人だつたらうなどいふ評判が山家片在所の女達の口に上つた。

今年五月の中頃、例年行く伊勢の関の宿で、田植多踊りのあつた時、身毒は傘踊りといふ危い芸を試みた。これは高足駄を穿いて足を挙げ、その間を幾度も／＼長柄の傘を潜らす芸である。

苗代は一面に青み渡つてゐた。野天に張つた幄帳の白い布に反射した緑色の光りが、大口袴を穿いた足を挙げる度に、雪のやうな太股のあたりまでも射し込んだ。関から鈴鹿を踰えて、近江路を踊り廻つて、水口の宿まで来た時、一行の後を追うて来た二人の女があつた。それは、関の長者の妹娘が、はした女一人を供に、親の家を抜け出して来たのであつた。

耳朵まで真赤にして逃げるやうに師匠の居間へ来た身毒は長者の娘のことを話した。師匠は慳貪な声を上げて、二人を追ひ返した。

何も知らぬ身毒は、其夜一番鶏が鳴くまで、師匠の折檻に会つた。

夜があけて、弟子どもが床を出たときに、青々と剃り毀たれた頭を垂れて、庭の藤の棚の下に茫然とゐる身毒を見出

した。源内法師の居間には、髪を焼いたらしい不気味な臭ひが漂うてゐた。師匠は晴れやかな顔をして、廂に射し込む朝の光りを浴びてゐた。然しそれは間もなく、制吒迦童子と渾名せられてゐる弟子の一人に肩を扼せられて出て来た、身毒の変つた姿を目にした突嗟に、曇つて了つた。

何も驚くことはない。あれはわしが刺つたのだ。たつた一人、若衆で交つてゐるのも、目障りだからなう。

身毒を居間に下らした後、事あり顔に師匠の周りをとり捲いた弟子どもに、こだはりのない声でから／＼と笑つた。

瓜生野の田楽能の一座は逢坂山を越える時に初めて時鳥を聞いた。住吉へ帰ると間もなく、盆の聖霊会が来た。源内法師はこれまで走り使ひにやり慣れた神宮寺法印の処へさへも、身毒を出すことを躊躇した。そして、その起ち居につけて、暫くも看視の目を放さなかつた。

どうも、うは／＼してゐる、と師匠の首を傾けることが度々になつた。

田楽師はまた村々の念仏踊りにも迎へられる。ちようど、七月に這入つて、泉州石津の郷で盆踊りがとり行はれるので、源内法師は身毒と、制吒迦童子とを連れて、一時あまりかゝつて自舌鳥の耳原を横切つて、石津の道場に着いた。其夜は終夜、月が明々と照つてゐた。念仏踊りの済んだのは、かれこれ子の上刻である。呆れて立つてゐる二人を急ぎ立て、そ／＼と家路に就いた。道は薄の中を踏みわけたり、泥濘を飛び越えたりした。三人の胸には、各別様の不安と不平とがあつた。

踊り疲れた制吒迦は、をり／＼聞えよがしに欠をする。源内法師は鑢でも磨つて除けたいばかりに、いら／＼した心持ちで、先頭に立つてぼく／＼と歩く。久かたぶりの今日の外出は、鬱し切つてゐた身毒の心持ちをのう／＼させた。けれどもそれは、ほんの暫しで、踊りの初まる前から、怪い不安が始中終彼の頭を掠めてゐた。彼は、一丈もある長柄の花傘を手を支へて、音頭をとつた。月の下で氣狂ひの様に踊る男女の耳にも、その迦陵頻迦のやうな声が澄み徹つた。をり／＼見上げる現ない目にも、地藏菩薩さながらの姿が映つた。若い女は、みな現身仏の足もとに、跪きたい様に思つた。けれども身毒は、うつけた目を睜つて、遙かな大空から落ちかゝつて来るかと思はれる、自分の声にはれ／＼としてゐた。ある回想が彼の心をふと躓かせた。彼の耳には、あり／＼と火の様な言葉が聞える。彼の目には、まぎ／＼と焰と燃えたつ女の奏が陽炎うた。

踊り手は、一樣に手を止めて、音頭の絶えたのを訝しがって立つてゐた。と切れた歌は、直ちに続けられた。然しながら、以前の様な昂奮がもはや誰の上にも来なかつた。身毒は、歌ひながら不機嫌な師匠の顔を予想して慄へ上つてゐた。……あちらこちらの塚山では寝鳥が時々鳴いて三人を驚かした。思ひ出したやうに、疲れたゞの、かひだるいだのと制吒迦が独語をいふ外には、對話はおろか、一つの言葉も反響を起さなかつた。家へ帰ると、三人ながらくづはれる様に、土間の庭の上へ、ぐたぐたと坐り込んだ。

源内法師は、身毒の襟がみを把つて、自身の部屋へ引き摺つて行つた。

身毒は、一語も上つて来ないひき緊つた師匠の唇から出る、恐しい言葉を予想するのも堪へられない。柱一間を隔いて無言で向ひあつてゐる師弟の上に、時間は移つて行く。短い夜は、ほのくあけて、朝の光りは二人の膝の上に落ちた。

芸道のため、第一は御仏の為ぢや。心を断つ斧だと思へ。

かういつて、龍女成仏品といふ一卷を手渡した。

さあ、これを血書するのぢやぞ。一毫も汚れた心を起すではないぞ。冥罰を忘れなよ。

身毒はこれまでに覚えのない程、憤りに胸を焦した。然しそれは師匠の語気におびき出されたものに過ぎない。心の裡では、師匠の言葉を否定することは出来なかつた。

経文を血書してゐる筆の先にも、どうかすると、長者の妹娘の姿がちらめいた。あるときは、その心から妹娘を攘ひ除けたやうな、すがすがしい心持ちになることもある。然しながら、其空虚には朧気な女の、誰とも知らぬ姿が入り込んで来た。最初の写経は、師の手に渡ると、ずたぐと引き裂かれて、火桶に投げ込まれた。身毒は、再度血書した。それが却けられたときに、三度目の血書にかゝつた。その経文も穢らしいといふ一語の下に前栽へ投げ棄てられた。

連夜の不眠に、何うかすると、筆を持つて机に向つたまゝ、目を開いて睡つた。さうした僅かの間にも、妹娘や見も知らぬ処女の姿がわり込んで来る。

四度目の血書を恐る／＼し出したときに、師匠の目はやはり血走つてゐたが、心持ち柔いだ表情が見えて、

人を恨むぢやないぞ。危い傘飛びの場合を考へて見る。若し女の姿が、ちよつとでもそちの目に浮んだが最後、真倒様だ。

否でも片羽にならねばならぬ。神宮寺の道心達の修業も、こちとらの修業も理は一つだ。

写経のことには一言も言ひ及ばなかつた。そして部屋へ下つて、一寝入りせいと命じた。経文は膝の上にとりあげられた。執着に堪へぬらしい目は、燃えたち相な血のあとを辿つた。

自身の部屋に帰つて来た身毒は、板間の上へ俯伏しに倒れた。蟬が鳴くかと思つたのは、自身の耳鳴りである。心づくとき黒光りのする板間に、鼻血がべつとりと零れてゐた。さうしてゐるうちに、放散してゐた意識が明らかに集中して来ると、師匠の心持ちが我心に流れ込む様に感ぜられて来る。あれだけの心労をさせるのも、自分の科だと考へられた。身毒は起き上つた。そして、机に向うて、五度目の写経にとりかゝるのである。夢心地に、半時ばかりも筆を動かした。然し、もう夢さへも見ることの出来ない程、衰へきつてゐる。疲れ果てた心の隅に、何処か薄明りの射す処があつて、其処から未見ぬ世界が見えて来相に思はれ出した。身毒は息を集め、心を凝して、その明るみを探らうと試みる。

源内法師は、この時、まだ写経を見つめてゐた。さうしてゐるうちに、涙が頬を伝うて流れた。俄かに大きな不安が、彼の頭に蔽ひかゝつて来た。九年前のあぢきない記憶が頭を擡げて来たのである。四巻の経文をとり出して、紙も徹るばかりに見入つた。どれにも思ひなしか、鮮かな紅の色が、幾分濃んで見えた。

部屋には、大きな櫛形の窓がある。それから見越す庭には、竹藪のほの暗い光りの中に、百合の花が、くつきりと白く咲いてゐる。

師匠が亡くなつてから、丹波氷上の田楽能の一座の部領に迎へられて、十年あまりをそこで過して居つたが、兄弟子の信吉法師が行方不明になつた頃呼び戻されて、久しぶりで住吉に帰つた。氷上で娶つた妻も早く死んで、固より子もなかつた。

兄弟子に対する好意、妻や子に対する愛情を集めて、身毒一人を可愛がつた。二年三年たつうちに、信吉法師が何処かの隅から、今にも戻つて来て、身毒を奪うて行き相な心持ちがした。思ひなげな目を挙げて、覗き込む身毒の顔を見ると、いよ／＼愛着の心が深くなつて行く。

信吉法師が韜晦してから、十年たつた。彼はある日、ふと指を繰つて見て、十年といふ言葉の響きに、心の落ちつくのを感じた。信吉の馳落ちの噂を耳にしたとき、業病の苦しみに堪へきれなくなつて、海か川かへ身を投げたものと信じてゐた。

遠い昔のことである。ある時信吉法師は寂寥と、やるせなさとを、この親身な相弟子に打ちあけて聞かしたのであつた。源内法師は足音を盗んで、身毒の部屋の方へ歩いて行つた。

身毒は板敷きに薄縁一枚敷いて、経机に凭りかゝつて、一心不乱に筆を操つてゐる。捲り上げた二の腕の雪のやうな膨らみの上を、血が二すち三すち流れてゐた。

源内法師は居間に戻つた。その美しい二の腕が胸に烙印した様に残つた。その腕や、美しい顔が、紫色にうだ腫れた様を思ひ浮べるだけでも心が痛むのである。そのどろ／＼と蕩けた毒血を吸ふ、自身の姿があさましく目にちらついた。彼は持仏堂に走り込んで、泣くばかり大きな声で、この邪念を払はせたまへと祈つた。

五度目の写経を見た彼は、もう叱る心もなくなつてゐた。

程近い榎津や粉浜の浦で、漁る魚にも時々の変りはある。秋の末から冬へかけて、遠く見渡す岸の姫松の梢が、海風に揉まれて白い砂地の上に波のやうに漂うてゐる。庭の松にも鶉の棲む日が来た。住吉の師走祓へに次いで生駒や信貴の山々が連日霞み暮す春の日になつた。弟子たちは畑も畝うた。籾にも出かけた。瓜生野の座の庭には、桜や、辛夷は咲き乱れた。人々は皆旅を思ふた。源内法師は忘れっぽい弟子達の踊りの手振りや、早業の復習の監督に暇もない。住吉の神の御田に、五月処女の笠の動く、五月の青空の下を、二十人あまりの菅笠に黒い腰衣を着けた姿が、ゆら／＼と陽炎うて、一行は旅に上つた。

横山のかげが、青麦のうへになびく野を越えて、奈良から長谷寺に出た一行は、更に、寂しい伊賀越えにかゝつた。草山の間を白い道がうねつて行く。荒廃した海道は、処々叢になつてゐて、まひ立つ土ぼこりのなかに、野植のくさが血を零したやうに咲いてゐたりした。

小汗のにじむ日である。小さな者らは、時々立ち止つて、山の腰から泌み出てる水を、手に受けためては飲んだ。さうして隔つた人々に追ひすがる為に、顔をまづかにしては、はしり／＼した。

国見山をまへにして、大きな盆地が、東西に長く拡つてゐた。可なりな激湍を徒渉りして、山懷に這入ると、淺田に代掻く男の唄や、牛の声が、よそよりは、のんびりと聞えて来た。其処は、非御家人の隠れ里といった富裕な郷であつた。

瓜生野の一座は、その郷土の家で手あついてもなしを受けた。源内法師は、すぐ明日の踊りの用意にかゝる。力強い制吒迦は、屋敷の隅の納屋から樽材などをかつぎ出すその家の下部らに立ちまじつて、はたらいてゐる。

身毒は、広々とした屋敷うちを、あちらこちらと歩いて見た。

それは、低い田居を四方に見おろす高台の上を占めて、まんなかちよんぼりと、百坪あまりの建て物がたつてゐるのであつた。

広くつき出した縁の上には、狐色に焦れて、田舎びた男の子や、女の子が十五六人も居て、身毒らの着いた時分から、きよとく、一行の容子を見瞻つてゐた。彼らの目色には、都人の羨しさを跳ねかへす妬み憎み、其から異郷人に対する害心と侮蔑とに輝いてゐる。若い身毒は、何処へ行つても、かうした瞳に出会つた。さうして、かうした度毎に、身の窄まる思ひがした。

子どもたちは、やがて、外から見え透く広い梯子を伝うてつしの上にあがつて行つた。

一行の為に、南開きの、崖に臨んだ部屋が宛てがはれた。

源内が、家のあるじに挨拶に行つた間を、ひろくと臥てゐた人たちの中で、ぽつゝりと一人坐つてゐた、彼を見とがめた一人が、どうしたのだと問うた。

どうもしない、と応へるほかには、いふべき語がわからない心地に漂うてゐたのである。

がらんとした家の中は、遠くから聞えて来る人声がさわがしく聞えた。子どもらは、いろんな聞きも知らぬ唄を、あどけない声で謡うてゐる。身毒は、瓜生野の家を思つた。しかし女気のない家の中に、若い男や中年の男が、仮に宿つてゐるといふだけで、かうした旅の泊りとちがうた処がないのだ、といふ心持ちが、胸をたぐるやうに迫つて来る。

くたびれたく。おや、身毒。おまへも居たのか。おまへはいつも、わるい癖ぢやよ。遠路をあゝくと、きつと其だ。なんてい不機嫌な顔をする。

身毒は、黙つてゐることが出来なかつた。

わしは、今度こそ帰つたら、お師匠さんに願うて、神宮寺か、家原寺へ入れて貰はうと思つてゐる。

おい、又変なこと、言ひ出したぜ。おまへ、此ごろ、大仙陵の法師狐がついてるんかも知れんぞ。今迄軒を立てゝゐた制吒迦が寝がへりをうつて顔を此方へ向けた。年がさの威厳を持つたらしいおつかぶせる様な声である。

さうだともく。師匠のお話では、氷上で育てた弟子のうちにも、さういふ風に、房主になりたいく言ひつめで、とゞのつまりが、蓮池へはまつて死んだ男があつたといふぜ。死神は、えてさういふ時に魅きたがるんだといふよ。気をつけなよ。

又、一人の中年男が、つけ添へた。

おまへらは、なんともないのかい、住吉へ還らんでも、かうしてゐても、おんなじ旅だもの。せめて、寺方に落ちつけば、しんみりした心持ちになれさうに思ふのぢやけれど。

あほうなことを、ちんぴらが言ふよ。瓜生野が氣に入らぬ。そんなこと、おまへが言ひ出したら、こちとらは、どうすればよい。よう、胸に手置いて考へて見い、師匠には、子のやうに可愛がられるし、第一ものごゝろもつかん時分から居馴れてるぢやないか。何を不足で、そんなことを言ひ出すのだ。

と分別くさい声が応じた。

けれどなあ、かういふ風に、長道を来て、落ちついて、心がゆつたりすると一処に、何やらかう、たまらんやうな、もつと幾日もくぢつとしてゐたいといふ氣がする。

熱し易い制吒迦は、もう向つばらを立てゝ、一撃を圧しつける息ごみでどなつた。

何だ。利いた風はよせ。田楽法師は、高足や刀玉見事に出来さいすりや、仏さまへの御奉公は十分に出来てるんぢや、と師匠が言はしつたぞ。田楽が嫌ひになつて、主、猿楽の座方んでも逃げ込むつもりぢやろ。

煮え立つやうな心は、鋭い語になつて、沸き上つた。身毒は、其勢にけおされて、おろくとしてゐる。あひての当惑した表情は、愈疑惑の心を燃え立たせた。

揺拍子。それを、円満井では、えら執心ぢやといふぞ。此ばかりや瓜生野座の命ぢやらうて、坂下や氷上の座から、幾度土べたに出額をすりつけて、頼んで来ても伝授さつしやらなんだ師匠が、われだけにや伝へられた揺拍子を持ち込みや、

春日あたりでは大喜びで、一返に脇役者ぐらゐにや、とり立てゝくれるぢやろ。根がそのぬつぺりした顔ぢやもんな。

……けんど、けんど、仏神に誓言立てゝ授つた拍子を、ぬけ／＼と繁昌の猿楽の方へ伝へて、寝返りうつて見る。冥罰で、血い吐くだ。……二十年鞆鼓や簞ばかりうつてゐるぢ、ちとらとつて、うつちやつては置かんぞよ。

制吒迦はとう／＼泣き出した。自身の荒ら語は、胸をかき乱し、煽り立てた。

分別男は、長い縁を廻りまはつて、師匠のゐる前まで、身毒を引き出した。

源内法師は、目を瞑つて、ちつと聞いて居た。分別男の誇張して両方をとりもつた話ぶりに連れて、からだ中の神経が強ばつて行くやうに思はれた。自身がまだ水上座に迎へられて行かなかつた頃、瓜生野家の縁の日あたりで、若かつた信吉法師の口から聞かされた一途な語を、目のあたりに復、聞かされてゐるやうに感じた。彼の頭には、卅年前と日の今の事とが、一つに渦を捲いた。さうして時々、冷やかな反省が、ひやり／＼と脊筋に水を注いだ。彼は強ひて、心を鎮めた。さうして、顔もえあげないでゐる身毒の、著しくねび整うた脊から腰へかけての骨ぐみに目を落してゐた。分別男や身毒の予期した語は、その唇からは洩れないで、舐める様な語が、身毒のさ／＼くれ立つた心持ちを和げた。

おまへも、やつぱり、父の子ぢやつたなう。信吉房の血が、まだ一代きりの捨身では、をさまらなかつたものと見える。かういふ語が、分別男や身毒には、無意味ながら悲しい語らしく響いて語り終へられた。深いと息が、師匠の腹の底から出た。

分別男は、疳癰づよい師匠にも似あはぬことゝ思つて、拍子抜けのした顔でゐた。師匠ももうとる年で、よつぽど箆が弛んだやうだと笑ひ話のやうにして制吒迦を慰めた。

あけの日は、東が白みかけると、あちらでもこちらでも蟬が鳴き立てた。昨日の暑さで、一晚のうちに生れたのだらう、と話しあうた。草の上に、露のある頃から、金襴の前垂を輝かす源内法師を先に、白帷子に赤い頬かぶりをして、綾蘭笠を其上にかづいた一行が、仄暗い郷土の家から、照り充ちた朝日の中に出た。さうして、だら／＼坂を静かに練つておりた。制吒迦は、二丈あまりの花竿を立てながら、師匠のすぐ後に従うた。

一行が遠い窪田に着いた頃、ぽつちりと目をあいた身毒は、すまぬ事をしたと思つて床から這ひ出した。衣装をつけて鞆鼓

を腰に纏うてゐた時、急にふら／＼と仰様にのめつたのである。鼻血に汚れた頬を拭うてやりながら、師匠は、も暫らく寝て居れと言うた。

身毒は、一夜睡ることが出来なかつたのである。今の間に見た夢は、昨夜の続きであつた。

高い山の間を上つてゐた。道が尽きてふりかへると、来た方は密生した林が塞いでゐる。更に高い峯が崩れかゝり相に、彼の前と両側に聳えてゐる。時間は朝とも思はれる。又日中の様にも考へられぬでもない。笹藪が深く茂つてゐて、近い処を見渡すことが出来ない。流れる水はないが、あたり一体にしとつてゐる。歩みを止めると、急に恐い静けさがみ身に薄^けつて来る。彼は耳もと迄来てゐる凄^せい沈黙から脱け出ようと唯むやみに音立てゝ笹の中をあるく。

一つの森に出た。確かに見覚えのある森である。この山口にかゝつた時に、おつかなびづくりであるいてゐたのは、此道であつた。けれども山だけが、依然として甦^{よみがへ}んでゐる。後戻りをするのだと思ひながら行くと、一つの土居に行きあたつた。其について廻ると、柴折門があつた。人懐しさに、無上に這入りたくなつて中に入り込んだ。庭には白い花が一ぱいに咲いてゐる。小菊とも思はれ、茨なんかの花のやうにも見えた。つひ目の前に見える櫺^{ろう}形の窓の処まで、いくら歩いても歩きつかない。半時もあるいたけれど、窓への距離は、もと通りで、後も前も、白い花で埋れて了うた様に見えた。彼は花の上にくづれ伏して、大きい声をあげて泣いた。すると、け近い物音がしたので、ふつと仰むくと、窓は頭の上にあつた。さうして、其中から、くつきりと一つの顔が浮き出てゐた。

身毒の再^{また}寝は、肱枕が崩れたので、ふつ／＼と覺めた。

床を出て、縁の柱にもたれて、幾度も其顔を浮べて見た。どうも見覚えのある顔である。唯、何時か逢うたことのある顔である。身毒があれかこれかと考へてゐるうちに、其顔は、段々霞が消えたやうに薄れて行つた。彼の聯想が、ふと一つの考へに行き當つた時に、跳ね起された石の下から、水が湧き出したやうに、懐しいが、しかし、せつない心地が漲つて出た。さうして深く／＼その心地の中に沈んで行つた。

山の下からさつさらさと簾の音が揃うて響いて来た。鞆鼓の音が続いて聞え出した。身毒は、延び上つて見た。併し其辺は、山陰になつてゐると見えて、其らしい姿は見えない。鞆鼓の音が急になつて来た。

身毒は立ち上つた。かうしてはゐられないといふ氣が胸をついて來たのである。

(附言)

この話は、高安長者伝説から、宗教倫理の方便風な分子をとり去つて、最原始的な物語にかへして書いたものなのです。

世間では、謡曲の弱法師から筋をひいた話が、江戸時代に入つて、説経節の題目に採り入れられた処から、古浄瑠璃にも浄瑠璃にも使はれ、又芝居にもうつされたと考へてゐる様です。尤、今の摂州合邦辻から、ぢり／＼と原始的の空象につめ寄らうとすると、説経節迄はわりあひに樂に行くことが出来やすいけれど、弱法師と説経節との間には、ひどい懸隔があるやうに思はれます。或は一つの流れから岐れた二つの枝川かとも考へます。

わたしどもには、歴史と伝説との間に、さう鮮やかなくぎりをつけて考へることは出来ません。殊に現今の史家の史論の可能性と表現法とを疑うて居ます。史論の効果は当然具体的に現れて來なければならぬもので、小説か或は更に進んで劇の形を採らねばならぬと考へます。わたしは、其で、伝説の研究の表現形式として、小説の形を使うて見たのです。

この話を讀んで頂く方に願ひたいのは、わたしに、ある伝説の原始様式の語りてといふ立脚地を認めて頂くことです。伝説童話の進展の径路は、わりあひに、はつきりと、わたしどもには見ることが出来ます。拡充附加も、当然伴はるべきものだけは這入つて來ても、決して生々しい作為を試みる様なことはありません。

わたしどもは、伝説をすなほに延して行く話し方を心得てゐます。

俊徳丸といふのは、後の宛て字で、わたしはやつぱり、いんとく、まるが正しからうと思ひます。身毒丸の、毒の字は濁音でなく、清音に讀んで頂きたいと思ひます。

わたしは、正直、謡曲の流よりも、説経の流の方が、たとひ方便や作為が沢山に含まれてゐても信じたいと思ふ要素を失はないでゐると思つてゐます。但し、謡曲の弱法師といふ表題は、此物語の出自を暗示してゐるもので、同時に日本の歌舞演劇の史の上に、高安長者伝説が投げってくれる薄明りの尊さを見せてゐると考へます。

踏み出しますか

”新しい日本をどうつくるか”。これが演題です。

主催者から与えられたものです。考えてみて、自分でもおびえるような結論らしきものが出てきたのですが、勇んで語りたいという気にはなれません。

ですから、以下は主張というよりも、自分で考えたプロセスだけを申しあげます。結論は、憂鬱なものなのです。

その前に、ちょっと余談をはさみたいとおもいます。ことし（一九九一年）、八十三歳で亡くなられた井上靖さんが、死の前、小康を得られたとき、会っておきたい人に会っておきたい、ということ、新聞社を通して対談ということになり、私にとって思い出ぶかいものになりました。たまたま日本をめぐる国際環境のはなしになったとき、

「日本も組合に入らなければいけませんね」

といわれたのが、印象的でした。それっきりの発言で、井上さんらしい詩的本質論というべき短いことばでした。

このことばは、奈良朝以来、あるいは明治以来の日本の姿勢をひとことで象徴していると思います。組合に入ったことがない。……

むろん、組合というのは、世界の寄り合いということです。

この余談を、私のはなしの最後のあたりでおもいだしてください。

文明ということばで、考えてゆきたいとおもいます。文明というのはあいまいなことばで、むろん社会科学の用語ではありません。各民族が国のわくを超えてそれに参加したいと願っている価値、あるいは――煮つめれば――基準というものでしょう。ローマ文明の基準は法と土木であり、十五、六世紀までのヨーロッパでは、ローマ文明の栄光の終焉に膺接して興

ったカトリックが文明そのものでした。

文明とは、たとえば航空機文明に参加するには、離着陸のときに、シート・ベルトを締めるといふ程度で済むほどに簡便なものでなければなりません。定義としていえば、たれでも参加でき、参加すればたれも普遍的価値を感じることができ、そこに便利さと平和を感じることができるといふものでなければなりません。

文明の普遍性に対し、それに裏打ちされる文化は、いわばその反対の位置にあります。文化とは、個人あるいはグループだけの特異なものでしょう。

たとえばお座敷で襖ふすまを開けるときに、立って開けたり、足で開けたりすれば安直でいいのですが、日本文化にあってはそうはしない。いったん座ってから両手で引き開ける作法を用います。非常に不合理な、特殊なものであります。しかしその文化を共有する者たちにとって、感じがいい。

文化は不合理で特殊ながら、それにくるまっていれば楽しく、気が安らぎます。

ちょうど私が、こうしてここに座っておりますと、私の体温で一センチか二センチほどの温かい空気の皮膜ができていますが、風が吹いてくるとそれが吹き飛んで、ちよつと寒くて居心地がわるいという感じになります。そのように、文化というのは被膜のようで、それにくるまっていれば、心地よくて、風邪をひかない。それぞれの民族および個人が持っている習慣というものは文化であります、それは他国や他人には及ぼすことができないものです。

私には癖がありまして、つい、事の起こりは何だろうとさかのぼって考えてしまいます。難しくいうと歴史ということですね。

日本について考えてみます。

明治、大正、あるいは昭和のある時期まで、古来からずっと文明を摂取してきた国であって、自ら文明を興した国ではありません。これはまあ、ほとんどの国がそうです。

日本はご存じのように孤島ですから、どうしても文化が単一化していきます。文化が単一化している社会では、文明は興

らないようすな（興らなくて幸いだったという気もないではありません）。文明というのは、世界史からいっても、そう数多く興っていませんし、文明というものがない時期もありました。

中国では古い時期に文明が興りました。

古い時代の「すきやき」は、ひとの話によりますと、鋤すのはがねの部分に、縁にお味噌の土手を作って、それで煮炊きしていくうちに、お味噌が溶けておいしくなっていくことから発展してきたようですね。中国でそのお味噌の土手という役割を果たしているのが周辺の民族でした。

中国大陆には古代からいろいろの生きていく方法を持った、さまざまな民族がいて、たとえば牧畜をしているもの、あるいは揚子江の周辺で米という不思議なものを、紀元前数千年以前から作っている民族もいました。また、青銅器をつくることに早くめざめた民族、さらには遠く西方から無の思想を伝えた民族、曲芸のような体技の上手な民族もがインドあたりからやってきて、定住したりしました。大切なことは中国大陆は農業の適地で、大いに耕作していたということです。たれもがそこへゆけば食えたという条件がありました。これが鍋の底のように文明の基本的なものです。

ですから、こんなにいろんな民族がいる条件の中では、普遍的なもの、たとえば「法」という普遍的なもので治めればいいということになる。たとえば中国古代の法家がそれでありました。これは秦の始皇帝によって試みられて失敗しました。

また孔子さんは親孝行ということと、礼儀ということを説きました。親孝行ということで血縁を大事にする、さらには礼儀ということで血縁外の人とのつきあいもうまくやってゆく。そのようにして大版図を治めてゆく。儒教はそのように普遍的思想として出現しました。

結局、孔子さんが死んでからのかのち、漢の初期にようやく儒教が国教になって（国教というとはいいませんが、わるくいうとこれが公認の訓説ドグマになって）、この大綱の中で中国文明が成立します。そうでなければあれだけ広大な天地は治められなかったでしょうね。のちのヨーロッパがカトリック文明を中心に統治されたように、中国もまた文明によって統治された経験を持っています。ただそのことが中国大陆にとって幸福だったかどうか知りません。一つのドグマで統治されると、やがて好奇心が衰弱するのです。

私は漢の武帝が儒教を国教化して以来、中国はずっと下り坂だとおもっていますが、むしろ紀元前の春秋戦国の頃のほうが近代という感じがしますね。

なんだか、中国の文明は逆三角形のようになっていて十九世紀の清朝に至ってはもう、古代のようでした。文明というのは古びるものであります。

日本の場合です。

日本は、文明は海外にあるとおもってきました。儒教も仏教も明治後のヨーロッパ文明もすべて海外にあり、このため日本人は、自分で普遍的思想を考えることをしませんでした。そういう条件にはなかったのです。

また文明受容という点でも、面としてべったりとうけ入れたことはありません。つまり文明国から占領されて（たとえばローマに支配されたガリア——いまのフランス——の地のように）それをうけついだということはなかったのです。

日本の場合、風変わりでした。みずから遠くへ行つて撰取するというかたちをとりました。七世紀初頭もそうでしたし、十九世紀後半もそうでした。留学生を、はるかに派遣するという方法でした。

理由は、孤島であること。ユーラシア大陸の諸文明から、地理的に離れていたためです。

他の文明（古くは中国文明、十九世紀以後はヨーロッパ文明）を征服を通じて受容したのではなく、自立しつつ、つまり文明を情報化することによって、自らつくりあげたのです。情報とは、ニュースと知識のことです。七世紀初頭、遣唐使というやり方で、つまり中国文明の皮膚の切片をもちかえることで自分の国に植皮しました。九世紀までの二百数十年、十数回にわたり、この船団を派遣しました。命がけでした。さらには、無料ではありません。唐からはよくしてもらいましたが、いろんな形でちゃんと支払いはしました。植皮ですから、もとの個体の抗体反応がおこります。その反応の結果が、九世紀末、遣唐使廃止後の独自の日本文化の展開（平安文化のことですが）であります。

日本は、“自然鎖国”が常態だったのかもしれませんがね。九世紀末、遣唐使をやめると、自然に鎖国状態になりました。孤島ですから、使いをやめると、縁切れになるのです。

あと、三百年経って、室町時代に遣明使が派遣されます。この途絶時代三百年のあいだに、日本は武家政権という、ヨーロッパの封建制と似たような体制、つまり歴史をつくりあげ、東アジア離れをしてしまったのです。

室町時代は、すでに中国に対してまったくユニークな存在になっています。

ですから、遣明使の時代になりますと、遣唐使のように、

「どうして、国をつくれればよいのですか。文明をつくるのは、どんな要素があればよいのでしょうか」という壮大な設問を持つてはゆきませんでした。

十五世紀の場合、貿易が国家としての商売でありました。

相変わらず本好きの国ですから、輸入品目の筆頭は書物と絵画でした。副産物として、禅宗が入ってきました。禅宗の副産物として、精進料理といわれるところの一種の中国料理が入ってきました。茶も入りました。

すこし感想を入れます。これらの情報のおかげで、十五世紀の日本——大名と太郎冠者が出てくる狂言の世界を思いください——におけるごく一般的な生活文化は、ひょっとすると同時代のヨーロッパよりすぐれていたかもしれません。

しかしながら遣明使が途絶えると、ごく自然にもどりの鎖国状態にもどりました。

法令による鎖国は十七世紀にはじまり、明治維新まで二百数十年つづきました。政治的鎖国が日本文化をつくったことは、よく知られるところです。

同時に、政治的鎖国は、日本人の閉鎖的な気質（じつに厄介な気質です）をもつくりました。

日本は、十九世紀後半になって開国し、一八六八年、いわゆる明治維新によって盛大に国際社会に入ります。国際社会に入ったのは二千年来、はじめてのことで、前代未聞のことでした。

それだけで（この自然鎖国が常態のような国にとって）物狂いのようなものでありました。物狂いは、日本の近代化の特徴でもあります。

自分が持っていた明治以前の文明のほとんどをすて、他の系列の文明を自発的にとり入れたのですから。つまり自身を他の者にほとんど入れかえてしまったのです。十九世紀の日本の転換の動機は防衛でした。幕末の尊皇攘夷ということばをおもいだしてください。

防衛というのは、現実には戦闘現象があつたのではなく、幕末、日本が滅亡するかもしれないという滅亡の危機感の共有が、西洋受容になつたのです。

ちょっと余談を申しのべます。ここは活字でいうと、小さな活字で組まれるべきですね。さきの遣唐使時代の日本が感じた文明の基準とは、

「礼」

ということでした。礼をもって唐の皇帝に接すれば、相手もうけ入れてくれる。

十九世紀の日本が感じた文明は、法と科学技術、それに軍事でした。軍事が、のちに自他に悲劇的な結果をまねきました。

私は、いま歴史的なことをしゃべっています。「新しい日本をどうつくるか」にたどりつく前に、古い日本は（こんにちもふくめて）どうであつたかを語っておかねばならないとおもってしゃべっています。

国家は、どこの国でも、法や文明や文化によって華麗に裝飾されています。しかし、どこの国だって、化けの皮をはいたほんとうの正体というのがあるでしょう。日本にも、あるにちがいありません。日本の正体はなにか。ちょっと露骨すぎることばですが、やはり正体は歴史から考えねばなりません。このため、つい過去に足をとられています。

くりかえしになりますが、六三〇年、日本がはじめて遣唐使を出帆させるときも、

——文明の基準とはなにか。

ということが気がかりの大部分だったようです。

明治維新をおこしたときも、そうでありました。

耳やすめのためにエピソードを申しあげますと、明治二年、三年という早い時期のはなしですが、制度や法律の担当だった佐賀の江藤新平が、どうも国家というのは法体系のことらしい、法こそ国家である、法の下には万人が平等である、ということに気づきます。江藤は、それが文明の基準だとおもったのです。江藤は正しかったとおもいます。

かれは整備をいそぎます。以前の法をなげうってあたらしい法を導入するのですが、なにぶん西洋の法については西も東もわかりません。

幕府時代の洋学者に、箕作麟祥みづくりんしょうという秀才がいました。

この箕作を司法大丞しほうだいじょうにし、開成学校教授を兼ねさせ、フランスの刑法と民法を翻訳させます。灰神楽はいかぐらがたつようないそがしさで、箕作の手もとで、翻訳が二、三枚できると、ひっぱがすようにして持って行って会議にかけるというぐあいだったといわれています。

箕作も法律を学んだ人じゃありませんから、フランスの法律の用語がわかりにくい。それまでの日本語にないものが多く、用語以前の概念もない。大苦勞をして、ついに悲鳴をあげて、

「江藤さん、私を留学させてください」

明治二、三年の政府はそんな時間的ゆとりはない。江藤はおもいつきました。じゃ、フランス人をよぼう、そのフランス人に、箕作が質問すればよい、そのほうが早い……。

そんな事情などでよばれたのが、フランスの弁護士、二十六歳のジョルジュ・ブスケでした。おなじく有名なボワソナーわやといども、御雇外国人としてやってきました。

大学も——一つしかありませんでした——各分野ごとに御雇外国人を入れます。かれらの給料はとびきり高かったので、よろこんで来ました。

あわせて、各省や大学の各分野から秀才を洋行させます。明治十年代の終わりごろには、御雇外国人と洋行帰りが交代し

ます。

その後も、秀才たちを洋行させつづけます。千二百年をへて第二の遺唐留^る学生^{がくしょう}がよみがえったようなもので、東京（各省と帝国大学のことです）はその受信盤であり、各地方や下級学校への配電装置でもありました。首都がこんな機能をもったのは、世界史に東京しかないのではないのでしょうか。文明の受容と配給装置としての首都であったために、日本人の異常な首都崇拜ができあがったのかもしれませんが。

要するに、世界の基準は何かということを模索し、それを摂取する、というものでした。

しかし、国内的なものと、基準とが、うまく合致したかどうかをみますと、日本史は各時代に亀裂と矛盾があります。その点について、おおいそぎでふりかえてみます。なぜそんなことでもっていちいち歴史をふりかえらねばならないかと申しますと、じつは（さきばしって結論を申しあげねばなりません）日本が、すでに世界の基準になう国の一つになっているのかもしれないからです。むろん、私などはこれをおそれます。古風にいうと、日本滅亡のきざしではないか、と思うほどに、です。なかば冗談です。

さて、歴史についての検証です。大まかにやります。

七世紀から八世紀にかけて、中国式の律令体制を入れました。あわせて隋・唐式の国家仏教というものを入れました。二つの原理が、一つの器に入ったのです。セットとしての文明でした。

当時の日本が理解し、展開した律令体制というのは、一種の一国社会主義でした。

このことは、公地公民、均田法、班田收授法といった用語で理解していただきます。農地を国有にし、農民に均等に分配してその収穫から租税をとります。息のつまるような制度で、奈良時代数十年はかろうじて守られましたが、平安時代には大きく崩れました。

律令制度がはじまるまでは、地方地方に大小の豪族がいて私民を擁していました。律令制によって私民は公民になりました。

なお、かれら豪族の不満があったはずでしたが、八世紀、七一〇年、奈良の都（平城京）ができますと、大小の豪族たちはおとなしくなります。それまで都市というものは日本になかったのですが、長安を模し、それをすこしちぢめた大都市が、万国博覧会のパビリオン街のようにしてできたのです。諸豪族はおそらくこれに圧倒されて、おとなしくなったのでしょう。

さて、奈良時代の仏教のことをのべねばなりません。

隋・唐は、国家仏教でした。なにしろ大乘仏教は小乗仏教とちがい、金がかかるのです。造寺造仏を伴います。結局は国家仏教になるわけで、これに帰依しますと、帝王といえども「三宝の御奴」として仏教の下に入ります。僧は官僧として国家公務員であり、鎮護国家という国家的原理を背負っていますから、ときに俗官俗吏を圧倒します。

その上、平城京に巨大官寺が集中し、弊害が多かつたろうと推量させます。

奈良朝国家がわずか七十年余で奈良をすてて、のち京都とよばれる平安京にうつった、その主要な理由は、おそらく鎮護国家という大それたものをふりかざす仏教から脱出したかったのでありましたろう。奈良仏教は、ソ連や中国における共産党のようなものでありました。国家の上に立ち、それを鎮護する形態においてです。

この機微については、あたらしい平安京（京都）にあつては、官寺を置かせなかったことで察しがつきます。さらには、新しい都では、最澄と空海に、国家よりも人間を救済する新教義をひらかせました。かれらの寺も、叡山と高野山といったように、都から遠ざけました。

以上で、仏教についてのことは、とどめます。

平安京にうつると、律令制がくずれてきます。律令制——つまり公地公民であるべきこと——をたてまえとしつつも、荘園という貴族や大寺などの私有農場がふえるのです。

平安期は、荘園という私領の時代であります。そのくせ、官制だけは、名のみで律令なのです。

明治維新までそうでした。日本史は、こういう体制の基本的矛盾を平然とかかえてきました。

平安後期ごろから、おそらく鉄が安くなったせいか、農業器具がふえ、各地で力のあるものが浮浪人をあつめて荒蕪の地を水田化する——開墾、墾田ということが流行しました。とくにその流行は、坂東（関東地方）に集中しました。それらの農場主を、武士とよぶようになりました。

開墾すれば、その水田は、貴族や社寺の荘園に組み込まれます。この天の下に私有地はないという律令のたてまえは依然生きていて、いかに自ら開墾したからといって私田はゆるされないのです。このために貴族や社寺にさしあげて、その土地の荘司などにしてもらいます。管理人であります。しかし所有権は不安定で、京都の荘園領主からあの土地は汝の叔父のものだ、といわれればそれまでです。

この不安定さに耐えかねて起あがったのが、十二世紀末の坂東武士の反乱でした。かれらは源頼朝を擁して鎌倉幕府をつくるのです。

武士の世になりました。全国土地に守護・地頭を置き、日本国を支配しました。余談ですが、鎌倉彫刻におけるリアリズムは、時代の風でありました。武士たちにとって、自分、もしくは自分の父親が開墾した土地が、やっと自分のものになったのです。律令という絵空事の世は去って、じかに手触のある世になったのです。

鎌倉の世がいかにいきいきした時代であったかは、その後の日本仏教が独自のものになり、武士をふくめた民衆のものになったことでもわかります。法然、親鸞、日蓮、道元という独創的な思想家が簇出したことでも、この時代の元気が察せられます。

明治維新後の法の整備は紆余曲折を経つつ、一八八九年（明治二十二）、帝国憲法が發布されます。

むろん、立法・行政・司法の三権分立という点では、十分に近代性をもつ憲法でした。

のち、昭和十年前後から国家を壟断するものになる統帥権（憲法上の大権の一つといわれるものです）というふしぎなも

のは、発布当時はあいまいな存在でした。

明治憲法を草したひとびとは、こんなものが昭和になって三権を超越して国家を牛耳るとは思わなかったでしょう。これが、明治憲法国家の矛盾でした。

さて「新しい日本をどうつくるか」であります。

またふりかえることになりますが、明治維新成立のときの日本は、外貨手持ち高ゼロで出発しました。いたいたいほどに非力でしたが、ともかくも外国に売りうるものは生糸であると思、それ売った金で、文明の受容をしました。その間、借金もしましたが、返さなかったということは一度もありません。国家は信用であるということをよく知っていました。このことを思うと、涙のにじむ思いがします。

さて、文明というのは基準であるということは、すでに触れました。

自由と人権を守るといふいまの文明の基準は、二十世紀もおわろうといふこんにち、ほとんど世界の公理のようになっていきます。ある国の政府がその人民を抑圧している、という状態があるとしますと、他の国がクレームをつけます。たとえば、中国政府が、天安門前広場にあつまった学生たちを武力で弾圧したことに對し、各国が抗議を申し入れました。日本政府も、それらの驥尾に付しました。十九世紀なら内政干渉になったようなことを、今世紀末には平気でやります。

戦後の日本は、国内的には自由と人権ということでは、十分といつていい水準に達しているでしょう。

しかし他国の人権あるいは自由という面での窮迫の状態に對して、他の国々に率先して苦情を申し入れるというほど、朗々と自信のある姿ではありません。自信というよりも、世界の現段階での文明を一人背負っている、という自負はない。

いま、それをもつ者は、アメリカでしょう。あるいはイギリスとフランスでしょう。日本はそれに従っているにすぎません。たとえば天安門事件における苦情申し入れとか、南アフリカ連邦における人種隔離の状態に對し、他にさきんじて制裁を加えるかどうか、ということ。イギリスの場合、南アフリカ連邦のその状態に對して、当時の首相サッチャーさんは

じつに果敢でした。文明の基準はイギリスにあると彼女は自負していたのでしょう。あるいは自負することによって、かつての大英帝国の栄光を世界に再認識させようとしたにちがいありません。

日本は、それほど果敢にやるわけにはいかないのです。理由は、歴史への遠慮というものであります。

ところが、経済力だけは大きくなっています。むろん、かつて文明の基準であつたいまのイギリスよりも、いまの日本ははるかに巨大です。

「日本は科学を生んだか」

ある英国人は、私に言いました。ほとんどの英国人は、全日本人にそのように言いたいでしょう。

むろん、生んだことはない。科学はヨーロッパの所産であります。

ところが科学もまた一八六八年、明治国家を出発させた日本にとって摂取すべき文明の基準でした。

とくに技術の導入には（理学部より工学的な学問において）じつに果敢でした。明治の四十数年間に、十九世紀の技術は、下手なりに、七、八〇パーセントはマスターしたかもしれませぬ。

科学と技術は、むろんちがう概念です。

しかし、ここ二十年來の日本のうごきをみてみますと、好ましい特異さに気づきます。科学と技術をくつつけて、”科学技術”といった分野において（それはじつに経済に組み入れやすいもののようです）特異であるような感じがします。電子工学、バイオテクノロジー、遺伝子工学といった分野で、科学が技術に癒着した分野かとおもいます。日本はそれを得意としはじめたのです。

いずれにしても、日本の経済的な体力が巨大になってしまいました。

むろん、アメリカの市場に物を売る、主としてアメリカの門戸開放主義に依存した上でのことです。

——商品がよかったから（値段が高くなって、故障がすくなくて、アフター・ケアもわるくなかったから）売れたのだ。——
——という話題は、いま私が語っている大づかみな話のなかでは、さし控えます。他の主題に属することだからです。

ここで、不用意に門戸開放主義ということばをつかいましたが、むろん狭義では、あるいは正確には、一八九九年（明治

三十二) から第二次大戦までのアメリカの対中国政策の基調をなした政策のことです (十九世紀のある時期までイギリスは中国貿易を支配していました。ところが、ドイツやロシア、イタリア、フランス、後発として日本が中国分割に乗りだして、イギリスの中国における老舗としての維持が困難になりました。門戸開放をひそかになえたのはイギリスだったといわれています。中国に対して手つかずだったアメリカにそれを言わせたといわれています。その後アメリカの基本政策になり、いわゆる「満州事変」以後の日本と対立しました)。

アメリカは、国内的にも、Open doorで、だからこそその自信の上に立って対外政策でもそのようにOpen doorを主張しつづけたのでしょう。

内外の市場開放主義こそ、アメリカの本質であり、将来もし濃密な保護政策をとるような事態になれば、アメリカはアメリカであることをうしなうでしょう。

アメリカ文明の特徴の一つは、経済におけるOpen doorであると思います。第二次対戦後、極東政策の用語としての門戸開放主義は歴史のファイルに入りましたが、開放的な市場経済は、アメリカの基本姿勢になりました。つまりは、あたらしい文明の基準になりました。このアメリカの基本姿勢もしくは本質は、農業と製造業において世界に卓越している、という条件においてのみ成立するものです。その二点で、アメリカは十分に自信がありました。

市場開放が、今世紀の文明の基準であり、それが人類に幸福をもたらす、ということとは、戦後日本は知っていましたが、しかしこの文明の基準ばかりは、明治後の日本はとり入れませんでした。とても脾弱でしたから。

アメリカのような体力があつてこそ可能だとおもっていたのです。

日本は巧緻に保護主義をつくりつつ、製造業を育成しました。アンフェアというのではありません。まさか、脾弱な自分がアメリカ国内の市場に打撃をあたえようとはおもわなかったのです。

アメリカは、第二次大戦後、閉鎖主義社会 (たとえばソ連型の社会主義) に、じつに過敏に反応し反発しつづけました。自分たちはオープンであり、フェアである、という姿勢が、アメリカにあってはほとんど神学化しているかのようでありま

す。

一九五〇年代の朝鮮戦争も、六〇年代のヴェトナム戦争も、閉鎖勢力に対するアメリカの挑戦だったとみられなくはなく、以上にのべたような意味でのアメリカ的文明主義のあらわれとみていいと私はおもっています。

なぜなら、朝鮮やヴェトナムにアメリカが兵を出したところで見返りで得る利益は考えられないからです。

二十世紀のアメリカのやり方は十八、九世紀の帝国主義とはまったくちがったものです（なお、当時、日本には、社会主義という文明の基準もある、とおもっているひとびとがすくなくなかったのですが、こんにちそれが文明の基準ではありえなかったということが一般的になっています）。

ヴェトナム戦争が終わったころ、アメリカの体力は数年で恢復して、以前以上に国内の市場は活発になるだろうとおもわれていましたが、結果はそうはなりませんでした。

逆比例して、日本の工業製品が（つまり文明の基準をもっていないとみられるこの国の工業製品が）アメリカの市場に大きく入りこんだのです。

さて文明の基準のなかに、自由と人権、それにやや声を小さくして市場開放ということを入れてもいいでしょう。市場ということには、労働市場も入ります。千数百年、自然的な閉鎖国家であった日本の場合、つらいですね。私など、どうもひるむおもいがします。日本がまだまだ外国人労働者に対しオープンに迎え入れるということにはなっていないことに、私かなよろこびを感じます。

しかし、これは文明のいない手としては、十全ではありません。私はそういうあたりを百も知りつつ、こっそりよろこんでいるのです。しかも将来に不安を覚えつつです。

このあたり、雑談風にのべます。

いまここで、遠いローマ文明や紀元前後から七、八世紀の唐ぐらいまではるかなむかしを頭におきながら、文明という

普遍的な価値というものを考えてみます。

文明はある条件のもとに興り、内部事情によって崩壊します。国の内外を一元的に、つまりきわめて開放的な市場経済を基礎にして興ったアメリカは、文明という意味では人類がひさしぶりにもったものです。

日本は文明を興す条件としては、欠けているように思えます。まず圧倒的な農業生産力が必要です。そこへゆけば異民族でも食べられるというものでなければなりません。

大唐帝国というのは、そのようなものでした。インドから仏教や曲芸をもってゆく者、さらには高麗から、はるか北アジア平原からくる者、それぞれが文化をもってきて、広大な農業地帯のつぼのなかでそれぞれが溶けて、普遍性をうみだしたのです。唐は帝室そのものが異民族でありました（唐帝国の創設者の李淵は、鮮卑族——モンゴル系——の出とされている）。

アメリカの場合、もっと徹底した（土着性がほとんどない）かたちでの文明であります。わずかに原住民がいるなかへ、イギリスを中心としたヨーロッパそのものが引っ越してきて、法を唯一至上のものにして、互いが互いを治めあったのです。

日本は、そうはいきません。

自然に成りたった国家のことを仮にネーション（nation）とよぶとしますと、日本史の発展のほとんどはネーションであり、法による国家——ステート（state）——ができたのは、明治憲法以来、近々百年にすぎません。

その間、つまり旧憲法時代、ネーションという古くからの根がはびこって、統帥権という形で国家そのものを扼殺したところもある国です。戦後憲法（一九四七年施行）から、わずかに四十四年です。もはや統帥権などというあやしげなものをもっていないませんが、いつ日本に自然国家がよみがえるか、すくなくともアジアは用心ぶかく見つめています。もっとも、こんにちの日本をよくみてくだされば、そんな用心はご無用であります。

「法によって万人は平等である」

ということ、日本人は一人残らず知っていますが、しかしその平等性がタフであることを試されていないのです。たと

えば、

「隣も、むこう隣も、そして町内の半分が、外国系である。しかも法によって平等である」というふうな試され方は、していないのです。

そういう国が、経済においてのみ（つまり製造業と貿易においてのみ）優位に立ったのです。ずいぶんつまらないことになったものです。

私も、現在の文明のにない手としては、ほとんど近頃値まで行っているようにおもいます。たとえば、自由であること。日本社会は自由ですね。かといって、自由を世界に売りだすほどに（文明のにない手は、文明の押しつけ手でもあります）タフな自由ではありません。

たとえば、さきに触れました労働市場の自由制についてです。仮に他国に自由を押しつけるからには、自らも自由でなければなりません。どうぞご自由に、すきなように日本にいらしてください、そして永住して働いてください、一定のゆるやかな基準によって日本国民になることができます」というふうなレベルには、私もは達していません。すくなくとも私などは、遠い将来はべつとして、たったいまのこととして申しますと、とんでもない、いまのままの日本がいいんです、とおもってしまうのです。なにぶんトシをとりましたから、目の前の安寧秩序を愛してしまうところがあります。そして子々孫々、日本が平穩無事であることを祈る気持がつよいのです。

ともかくも、アメリカの開放的な市場経済の社会に手も足もつつこんで成功した以上は、自らもアメリカと同様のレベルで市場開放せざるをえないことは、当然なことです。

このままの成長をつづけていけば、やがては労働市場も、いまの幅などよりはるかに大きな規模で開放せざるをえなくなるでしょう。『国際化』などというような、口頭禅ですむ規模ではありません。

もし大きな規模で労働市場を開放すれば、国家そのものが変質します。より純粋度の高いステートたらざるをえなくなるでしょう。

そこまでして我々は文明のいない手にならざるをえないのか、というのが、“新しい日本をどうつくるか”という問題に入る前の私どもの、すくなくとも私の、当惑であります。

もはや遣唐使の日本も、鎌倉武士の日本も、江戸の町人文化の日本も、すべて思い出の中の日本にならざるをえないのです。これ以上の道は、古い日本を大きくすてるということだ、ということのおびえが、私にあります。お大師さんのご利益も忠臣蔵の物語も、遠い思い出になるでしょう。むろん半分冗談です。私はこどものころからアジアが大好きでしたから、この想像には、多少の楽しさが入っています。

ともかくも、日本が閉鎖的でありえた段階は、いまがぎりぎり一杯のところだろうとおもいます。

あとは、多様性のなかで、根幹になる日本の炉心のようなものが溶けてしまいか、つまり骨なしの多様性になって泥沼のようになるか（そういう国はほろびるでしょう）、それとも日本の炉心（アメリカでいえば、初期のプロテスタンティズムのようなものです。日本の場合は、武士道とうけとつてもよく、江戸っ子の心意気とうけとつてもいいでしょう。江戸っ子の心意気は、流入してくる他地方からのひとびとのなかで、普遍性として、醸だされたものです）をたかだかこのこすことによって多様性に堪えられる精神的体力をつくっておいて、日本を普遍化させてゆくしかないのではないのでしょうか。

要するに、“日本人はいいやつらだ”というものを再生産してゆくことしかないのではないのでしょうか。やや抽象的にいえば、古来の日本精神史における“いい感じの日本”というものを再発見して再充電しつつ、多様性に堪えてゆくしかないかもしれません。

「日本も組合に入らなければいけませんね」

という言葉に対する答えは、以上のようなものです。

私の話は、ほとんどためらいの連続です。日本人がもし腰を入れて世界の組合員になる気なら、いまの日本の場合、文明

の責任をもたざるをえません。

ふるくからの先進国——イギリスやフランスのような——は、内心、滑稽さを感じて、

「日本に、それをやるだけの哲学があるのかね」

と、ささやくかもしれません。

じつは、日本には、そういうものはあるんです。

牢固^{ろうこ}としてあります。唐突^{とうとつ}のように思われるかもしれませんが、華嚴^{けごん}の哲学です。

華嚴の哲学というのは、日本人が大すきだった大日経、仏説阿弥陀経などに入っている思考法もしくは世界把握法です。いまは俗哲学として日本人の血肉のなかに入っています。キリスト教のような絶対者がいる思想ではなく、世界を相対的なものとして、それが光明の根源に総和されているという考え方です。光明を鑽仰^{せんやう}しつつ、万物は、お互いさまという思想です。みな関連しあつて、小は原子や分子のレベルから大は宇宙にいたるまで、すべてがお互いのおかげで生かされている、という考え方であります。

日本の青年海外協力隊なども、意識するしないはべつとして、こういう伝統思想をどこかで感じているからこそ、あのよう^{よう}に熱心にやっておられるのだらうとおもいます。

「組合に入る」

ただそれだけで、私は以上のようにためらっています。

明治時代の日本は、電車でいえば小児キップでした。大正時代の国際連盟（これはたとえです）でも、日本は半分、尻をずらしていました。昭和初年から二十年までは、反組合でした。戦後は、被占領日本^{ひせんりやうにっぽん}で出発しました。近代化を遂げてから、一度もオトナの精神として組合に入ったことがないのです。これはたとえば、国連でも、旧敵国ですから、常任理事国ではありません。

むろん常任理事国であろうとなかろうと、それは形にすぎません。日本が精神として、世界のオトナとして、世界の面倒がみられるか、つまり、文明の基準たりうるか、そういうことだけです。

まことに、私は日本国民の意識という上からみて、そのことにすぐさまには自信がありません。

”自由と人権“

が、どうもここ当分（おそらく半世紀以上）の文明の基準だと思います。この基準は、ときに世話人が人数のために水火にとびこむ覚悟がなくては、基準たりえないようにおもいます。むろん、西部劇のスターのようにしてとびこむのではなく、日本的なやり方でもっておのれの問題として、その課題に肉薄するということです。

とてもいまの日本では、まだまだむりかもしれませんね。われわれが、自分自身を教育してからでないと、こんなに今の現状のままのような場に立つというのは場ちがいなことになります。なにしろ、文明の主役になるということは、こいつばかりはやったことのないゲームですから。

それとも、ひきかえますか。つまり、いまの日本経済を大きく減速させて、中進国の段階にまで日本をもどしますか。むろん、敵に背をむけるのは、鎌倉以来、日本人は恥としてきました。日本人のたれもが、そんなことをのぞまないでしよう。

それならば、一歩、踏み出しますか。

あるいはこのままでつぎの百年、やってゆきますか。もしそれができれば、相当なタマだといえそうですね。

江戸人の發想法について

佐久間の下女は箔附のちぢれ髪

裏に來てきけばをとつひ象に乗り

お竹大日如來のことは民俗學のほうではどうかあつかふのか知らない。某寺の聖のはなしとか流しもとの飯粒を大切にすることはなしかがこれに關係づけられてゐるやうである。しかし、この風變りな如來緣起が市民生活の歴史の中でいかなる關係物によつて支へられてゐるにしろ、前もつて能の江口といふものがあたへられてゐなかつたとすれば、すなはち江口に於て作品化された通俗西行噺が先行してゐなかつたとすれば、江戸の佐久間某の下女が大日如來に化けるといふ趣向は發明されなかつたらう。江口の君が白象に乗つて普賢菩薩と現じたといふ傳承は前代から見のこされて來た夢のやうなものだが、江戸人はその夢を解いて、生活上の現實をもつてこれに對應させつつ、そこにまたあらたなる夢を見直すことを知つてゐた。そして、かういふ操作がきはめてすらすらとおこなはれてしまふので、それがかれらの生得の智慧のはたらきであること、同時に生活の祕術であることを、江戸人みづから知らなかつた。後世が作爲の跡しか受け取らなかつたとすれば、當の江戸人はそのとほり駄洒落さと答へてけろりとしてゐるであらうが、じつは後世がむざむざとかれらの智慧にだまされてゐるやうなものである。お竹大日如來の場合には、文學のほうではたまたま川柳の擔當になつてゐるので、後世の文藝批評家はなるべくこれをやすつぽく踏み倒すことによつて自家の見識を示さうとする。われわれはその見識の高下を知らない。

箔附のちぢれ髪といふ。おもての意味は明かに佛菩薩の螺髪のことをいつてゐる。しかし、箔附のとは、れつきとした、極めつきの、例のあれさ、といふ意味でもある。すると、ちぢれ髪とはなにか。按ずるに、ちぢれ髪の女は情が濃いといふ俗説を踏まへてゐるのだらう。ここで「こなたも名におふ色好みの、家にはさしも埋木の、人知れぬことのみ多き宿に」と

いふ江口の本文を思ひ出して置いてよい。江戸の隠語に、来る者を拒まない女のことを、醫者の慣用藥にたとへて、枇杷葉湯といふ。お竹はけだし枇杷葉湯なのだらう。お竹とはかならずしも佐久間家の婢にはかぎるまい。市井の諸家の臺所に多くの可憐なるお竹がゐて、おそらくはときに町内の若者を濟度することを辭さなかつたのだらう。すなはち見立江口の君である。おろかな、たわいない、よわい女人はここにまで突き落されたかと見るまに、一轉して後シテの出となる。臺所は「世をいとふ人とし聞けば假の宿に心とむなと思ふばかりぞ」といふ假の宿である。また「惜しむこそ惜しまぬ假の宿」である。すでにして、お竹は「これまでなりや歸るとて」白象に乗つた遠い菩薩像であつた。その姿の消えた後に、裏に來て安否をとふものは、かならずやかつて濟度をかうむつた町内の若者の一人なのだらう。臆測をたくましくすれば、この相手方もまた一所不住の浮かれもの、見立西行といふころいきであらうか。

江口の君をおもかげにしたこのお竹の説話から、何らかの思想を抽象しようとするのは愚に似てゐる。佛説の緣起觀がはたらいてゐるといつただけでは説明にもなるまい。けだし、江戸人にあつては、思想を分析する思辨よりも、それを俗化する操作のほうが速かつたからである。かれらにとつて、象徴が對應しないやうな思想はなきにひとしかつた。かれらがときに無思想と見られがちである所以だらう。げんに、お竹説話に於て、われわれはそこに二重の操作しか見ない。一面は江口こそ歴史上の實在で、お竹こそ生活上の象徴であるやうな轉換の仕掛に係る。また一面は眼をひらけばお竹、眼をとちれば大日如來といふやうな變相の仕掛に係る。いはば、お竹すなはちや、つし、大日如來である。またお竹説話すなはちや、つし、佛説緣起觀である。そして、この假定が忽然と生活上に立てられたとき、それは歴史上の現實たる江口説話に依つてとうの昔に證明済といつたあんばいで、とたんに挺でもうごかない。さつそく筆まめな學者先生がお竹の實話を隨筆に書いたり、慾ばりの香具師がお竹の遺物を小屋掛で見せたりする。江戸に於ける俗化といふことは右體の次第から離れたところではたちまち意味をうしなふだらう。またや、つしといふ思想はおなじことばのや、つしといふ操作と不可分であるところにはじめて活機をうるだらう。このや、つしといふ操作を、文學上一般に何と呼ぶべきか。これを俳諧化と呼ぶことの不當ならざるべきことを思ふ。

一般に、江戸の市井に繼起した文學の方法をつらぬいてゐるものはこの俳諧化といふ操作である。およそ江戸文學といふ

精神上の仕事は後世のいかなる研究法をも戸惑ひさせるやうな出来ぐあひになつてゐる。なにやら近代ふうの文學論で律氣に割り切らうとすると、つるりとすべつて小バカまはしにされる。研究家が近代だと思ひこんでゐるものよりも、江戸のはうが近代と呼ぶに當つてゐるからだらう。考證から這ひこんでも、好事からまぎれこんでも、八幡の藪知らずでうすばんやりとする。考證家の博搜よりも、文學の影の逃げるはうが速いからだらう。また好事家の生醉よりも、江戸作者の意識のはうが高いからだらう。この奇怪なる文學の性質をうかがふためには、あらかじめ立てるすべての假定はどこかではぐらかされることになるかも知れないが、しかもなほ方法の變通に關する假定を立てておくことの便利なる所以を思はざるをえない。しばらく、精神を天井に上げ思想を縁の下に押しこんで置いて、はなはだひとをあざむきやすい操作のはうを見ることにする。

川柳の末技といへども、なほ通俗俳諧たる雰圍氣のにはひをとどめてゐる。しかし、川柳の場合では、俳諧の要素が低地の塵に錯亂してしまつたていたらくで、これを文學の網に掬ひ上げようとしても結縁がうすいだらう。江戸の俳諧といへば、芭蕉の正風とその延長（ちなみに延長とは下落といふことを矯飾していふ語である）のほかには、俳諧の運動の自在神通についてなにもものを見まいとするのが後世の窮屈な常識らしい。そして、この常識は川柳と併せて漫然と狂歌をも貶してゐるらしい。衣冠を見てそのひとを見ないやうなものだらう。また菽麥を見てその別を知らないやうなものだらう。俳諧の轉換の奇法はかならずしも江戸の芭蕉から京都の蕪村へといふ尋常五十三次の路程のみをたどつてはゐない。別に江戸の市井にこれを承けるものがあつて、文學様式上の新發明を以ておこつてゐる。すなはち天明狂歌のことをいふ。

狂歌の何たるかを論ずるのはともかくとして、ここではただ天明狂歌がそれ以前の狂歌ともまたそれ以後の狂歌ともまつたく品物がちがふといふことを記しておくにとどめる。江戸初期に上方におこり江戸に轉じた狂歌の歴史のことをいふひとは、おほむねまづその先祖さがしからはじめて、萬葉集の戲笑歌、古今集の俳諧歌、有心、無心、柿の本、栗の本の別などとかぞへて來て、それらとの續柄を案じわづらつた末に、ほんやり曉月坊あたりからはなしの絲口を引き出すことになつてゐる。しかし、かりに狂歌の意義と系譜とについて定説のしたかふべきものが立てられたとしても、それは天明狂歌といふ文學運動の性質についてなにごとをも語らないだらう。けだし、天明狂歌は江戸初期の上方狂歌江戸狂歌をもふくむ前代の

諸派に對し、操作に於て意味を異にしてゐるからである。

狂歌には本歌取といふ操作がある。どういふものか、本歌取にはあまり秀作がない。たとへば、これも駄作の例になるが、萬載狂歌集、山手白人、柏餅、なら坂やこの手にもちし柏もちうらおもてよりさすりてぞくふ。かういふ操作はなにも天明の發明ではない。げんに、おなじ集に、雄長老、いつはりのある世なりけり神無月貧乏神は身をもはなれぬ。本歌取とは、すなはち古歌の俳諧化である。そして、この操作は天明以前にもあつた。また狂歌の家集撰集を出すこともすでにそれ以前におこなはれてゐた。しかし、一首の端ではなくて、ある狂歌集そのものが本歌取であるやうな、いひかへれば古の歌集の俳諧化であるやうな例がどこにあるか。ことばの繰まはしの末ではなくて、歌調歌格に於て某の古歌集に對應してゐるやうな狂歌集がどこにあるか。天明以前には一つもないだらう。天明に至つて、萬載狂歌集（撰者四方赤良すなはち蜀山）といふ狂歌撰集のあらはれるに當つて、われわれは初めてこれを見る。では萬載狂歌集が歌調歌格に於て對應してゐるところの古歌の撰集とはなにか。たしかに、わたしはここで蜀山菅江橘洲らの作例をあげて當該古歌撰集と比較論證しなくてはならないはずだが、今その餘白がない。やむをえず證明を省略して、性急に結論をいふ。それは古今集にはかならない。萬載狂歌集は古今集の俳諧化である。一般に、日本の歌（ただに狂歌にはかぎらず）の歴史の上で、天明狂歌とは古今集の精神の轉換的運動である。

ところで、江戸狂歌の歴史の上で、天明狂歌とは、前代の未得卜養らの狂歌あるひは上方の貞柳行風らの狂歌の、自然の發展と見るべきだらうか。わたしはまた性急にその決して然らざるべきことをいふ。ここに、元祿から享保にかけて、はなはだ意味深長な江戸狂歌の空白時代がある。この空白時代の謎は一見解きがたきに似るかも知れない。しかし、天明狂歌の俳諧性の何たるかをさとれば、この謎のたちまち解きやすきを知るだらう。天明以前、江戸には周知のごとく俳諧史上の大椿事がおこつてゐる。元祿の芭蕉の發明に係る俳諧の連歌である。（一句立の發句といふ可憐なる短詩のことは取り上げるには及ばない。）芭蕉詩の運動は堂上派の連歌の俳諧化といふ操作の上に立ちつつ、おどろくべき斬新清爽な藝術境を開してゐる。この椿事を前代に承けて、俳諧の運動が天明の新事件を突發させるに至つたのはむしろ必然のことに屬するだらう。元祿の俳諧を正とし雅とすれば、天明の狂歌は俳諧の奇にして俗なるものに當る。芭蕉から蜀山に至る運動の筋道は

決して俳諧の下落ではなくて、その俗化である。下落は蕉風の亞流の側にあつた。俗化といふことばの正當な意味に於て、江戸俳諧の俗化とは、流行が芭蕉の發句から其角の發句に移つたといふことではなくて、性質が猿蓑から萬載狂歌集に變つたといふことである。これが俳諧の論理である。

天明狂歌がそれ以前のいかなる狂歌とも性質を異にしてゐるやうに、天明狂歌師はそれ以前のすべての狂歌師と作者的人格に於てかならずしもおなじではない。狂歌師はみな狂名をもつてゐる。これは天明でもその前後でも變りがない。ただ天明に至つて狂名の意味の一變してゐるのを見る。かつて狂歌師の狂名は一般文人の雅號、俳諧師の俳名とおなじく、その名の中に作者が存在してゐた。すなはち有名人格であつた。しかるに天明狂歌師はその狂名の中に不在である。すなはち無名人格である。いひかへれば、讀人不知といふことにはかならない。かつて芭蕉俳諧の連歌は、世界が出来上つたとき、作者の名を忘れさせた。今、萬載狂歌集は作者が名を抛棄することから世界を築き上げてゐる。狂名がふざけてゐると、ひつぱたいてみても、作者はそこにゐない。この簡單な事實を説明するためには、複雑きはまる天明狂歌師の列傳を本に書かなくてはならないだらう。たとへば、天明狂歌に於ける蜀山の位置は元祿の俳諧に於ける芭蕉のそれに當り、また萬載狂歌集の撰者たるかれの位置は古今集の撰者たる貫之のそれに當るべきだが、しかも蜀山といふ存在はみづから現象化するといふ仕方によつて芭蕉貫之といふ存在を俳諧化してゐるやうなものである。

明治以後、はるかなる芭蕉俳諧の連歌からわづかに卑近なる一句立の發句を抜き取ることにしか知らないやうな、通俗鑑賞法が世におこなはれてゐるていである。たぶん、人間と仕事しか見ようとしないう外國人の文學觀傳來のさもない料簡だらう。證據を見たうへでなくては神を信じないといふものの態度に似てゐる。この鑑賞法の眼鏡をもつて天明の狂文學の場に臨んだとすれば、かならずや滿目空白にしてなにもものをも見とどけられないだらう。けだし、天明狂歌は仕事ではなくて運動であり、天明狂歌師は人格ではなくて假託だからである。しかし、後世の見そこなひこそ昔日の風狂詩人どもの思ふ壺にちがひない。かれらをして我事成れりと草葉のかげでほくそゑましめることになる。みすみす敵の術中におちいるとは、このことである。

ここに一挿話がある。文化のはじめごろ、さきに蜀山から判者をゆづられた鹿都部眞顔はおそましくも狂歌が古今集の俳

諧歌から出たものといひ立てて、わざわざこれを俳諧歌と改稱し、もつぱら姿態をつくり點料をむさぼることをたくらんだ。政以後狂歌と狂歌師との相場ががつたり下落したことの価を作つたものだらう。作者みづから狂歌のかならずかくあるべきことを規定し、狂名の中におのれの貧弱な全存在を露出するや、たちまち放曠自在の世界は消えうせて、あとにはただやつぱい人間と劣等な品物だけが居残ることになつたとは、天明狂歌の微妙な性質につき消息の一端をつたへてゐる。ひとが俳諧の何たるかをうかがはうとするとき、芭蕉俳諧の連歌といふ正統の文學系のみを觀測するにとどまるよりも、併せて天明狂歌といふ危険きはまる文學系をも觀測したほうがより近似的な値をうるに至るべきことを思ふ。

天明狂歌はそれ以前の江戸上方の雜俳を呑んでゐるとともに、芭蕉に依つて切斷された元祿以前の正系俳諧の主たる要素をも食つてゐるかのごとくである。主たる要素とは、俳諧といふことばが元來意味するところの滑稽の謂である。しかし、天明の新發明に係る世界、たとへば萬載狂歌集がひとにうつたへて來るものはただに滑稽的抒情のみではない。これを展望すれば、そぞろにかなしい。いはば出來上つた世界の外に身を置いてゐるところの、不逞にして遺瀨ない讀人不知の風狂詩人らの宿命はかならずしもひとの願を解くものではなからう。この世界が俳諧的操作のうへで遠く古今集の精神を踏まへてゐることは前に述べた。ここに古今集を拉し來つた所以は現實の地盤でこれを支持するものの在すべき事情があつたのだらう。按ずるに、江戸俗間の古典文學教養にして、その常識に於て市井に流れ、その抒情に於て人心にひびいてゐたのは、古今集に如くものがなかつたのだらう。當時の江戸人の生活のはうを除外していへば、ここにもまた萬載狂歌集の成立すべき據りどころがあつた。

江戸俗間の文學教養のことでは、古今集のほかにあげるべきものが一つある。唐詩選である。ただし唐詩そのものへの理解ではなくて、唐詩選といふ本への昵懇である。そして、この本を日本流の訓み方で吟ずるところの情操である。この現實の昵懇と情操とを踏まへつつ、はたせるかな、蜀山銅脈を宗とする狂詩の發明がおこつてゐる。しばらく天明狂歌と並べて天明狂詩と呼んでおく。いま、狂詩の源流を探つて、十訓抄、閉口後來客、含陰先達儒あたりを引合に出すにも及ぶまい。もし句意の風狂に似るものを求めるとすれば、たとへば倭漢朗詠集、上卷秋、源順の女郎花のごときをもかぞへることができるとも知れない。しかし、天明狂詩の風骨を感得するためには、かならずしも先祖さがしを要さないとはいふこと、またそ

れが文政以後明治初年にわたる狂詩の流行とは、他人の空似ぐらゐの續柄しかもたないといふことは、なほさきに述べた天明狂歌に於ける形勢と相似てゐる。絮説をばく所以である。

天明狂詩の風骨は唐詩選の諺解、すなはちこれを俳諧化するといふ操作の中にひそんでゐる。一例を示せば、四方山人、五明樓贈雛妓、花扇連襟夜入床、五明送客大門傍、樂遊雛妓如相問、一片執心在玉章がある。これが王昌齡、芙蓉樓送辛漸、寒雨連江夜入吳、平明送客楚山孤、洛陽親友如相問、一片冰在玉壺を踏まへてゐることは一見して明かだらう。いはば本歌取に對して本詩取とも呼ぶべき操作に屬する。しかも、その本詩を踏まへることはただに操作上の關係に於てのみではあるまい。一は唐人別離の情の悲愴なるもの、一は粹人遊里の情の嫋嫋たるもの、詩意たちまち逆轉しつつ、相對して奇怪である。當時の江戸人はこれを見て、かならずや操作の妙に感じ、詩意の變におどろき、陽に蜀山詩に笑ひ陰に昌齡詩に泣いて、思はずひやりとさせられたのだらう。かういふ交渉から離れたところでは、天明狂詩の鑑賞法はぐらつくだらう。もし作者が内に士人の氣節清操を秘める底の人物でなくてはよく外に戲詠に遊びがたいといつたとすれば、言つよくして反つて心をうしなふの憾みがあるかも知れない。しかし、姿の见えない作者の影がいつか享受者の心に忍びこんで來てゐるところに、ひやりとさせられる所以があるのだといへば、まんざらことばの綾ではないかも知れない。狂詩作者でその技巧のあるひは蜀山を凌ぐものはすくないだらう。たとへば半可山人の妙は世これを稱する。なるほど半可山人の忠臣藏十一段は斯道の眉目ではあらう。しかし、これははるかに銅脈先生の婢女行の後塵を拜するもので、あまり高く買へない。漫然と出來ばえがうまいまづいといふ鑑賞法では、おそらく天明の江戸人の心に於ける切實な鑑賞法の原型から相去ること遠くなつて行くだらう。狂詩の功は發明をもつて論ずる。大和ことばによる狂歌とはちがつて、本筋の漢詩を作ることさへどうせ唐人の借物なのだから、假託の狂詩に至つては、技巧論に深入しては狐に化かされるだらう。

江戸の俗間に於ける唐詩選の流行について、ここに一證がある。京傳の洒落本繁千話の中に半可通が青樓の名代部屋で待ちぼうけをくはされてゐる條を見る。枕頭に小屏風があつて、それになにやら字が書いてある。長信宮中草、年年愁處生、時侵珠履跡、不使玉階行といふ二十箇の四角な字である。半可通は鼻をうごめかしてこれをでたらめに訓む。たとへば、轉句と結句とをトキニナニナニノ跡、使ヲ呼バズニ二階へ行クグラウといふ訓み方である。これまた唐詩選の諺解の一種

に類するだらう。ところで、この條は明かに讀者の笑を待ちうけてゐる。そのためには、あらかじめ讀者側に笑ふ用意のあるべきことが豫想されてゐるはずだらう。すなはち、當時の洒落本の讀者はこの二十箇の四角な字が崔國輔、長信草の五絶であることを先刻承知でゐたのだらう。またかれらはつとに漢成帝と班婕妤との故事をも知つてゐて、作者が待ちぼうけの半可通に配するに漢宮の婦女閨怨のおもかげをもつてしつと題詩の場面に適切なるものを措いた趣向に、あつと感服したのだらう。もし一般讀者側にこれを笑ふ用意が豫想されてゐなかつたとすれば、京傳ほどのわけ知りの作者がわざわざ讀者に恥をかかせるやうな四角な字をもてあそぶはずはあるまい。

右に、わたしはゆくりなく洒落本のことをいひ、また遊里のことをいつた。じつはわたしの意中にひそかに考へるところがあつて、さらに洒落本から人情本にわたらうとしてゐる。ひそかに考へるところとは、江戸作者の究極の發明たる遊里の觀念に關してゐる。お竹大日如來の説話から特製の遊里の觀念に至るまでの筋道には、江戸人の發想法の發展があるやうにうかがはれる。他日の機會に書く。

* 花色如蒸栗。俗呼爲女郎。聞名戲欲契偕老。恐惡衰翁首似霜。

桃太郎の誕生

一 知られざる日本

是は最初は大づ自分一人の楽しみの為に、手を著けて見た研究であるけれども、今に及んでは誰か聴いて下さる方を捜してあるく必要を感じる。桃太郎の鬼が島征伐などといふ昔話は、既に御互ひの家の子供すらも、其管理を辞退する程のたわいも無いものではあるが、尚それが独り日本現代の一つの問題であるのみで無く、實際はやはり亦世界開闢以来の忘るべからざる事件として、考察せらるべきものであつた。しかも壮年の学者が全力を之に傾けてさへも尚五年や十年では整理しきれぬほどの材料が我々の邦には保存せられて居た。それが此頃になつて漸く明かになつて来たのである。此研究の後半分だけは、是非とも志を同じうする何人かに引継いで置く必要がある。私が強ひてこの不完全なる研究を発表するのも、本願は是より他にはない。

我々の昔話の中でも、特に外国に於ける斯道の学者を感動せしむべきものは英国でいふシンドラ、グリム童話の灰かつぎ姫、日本で糠福米福などゝ呼んで居る物語であつた。是が我邦に入つて来てから、如何に短くても千年は超えて居るだらうと思ふが、話は其間に誠に僅かばかりしか変化を受けて居ない。蜜柑の皮を遠くから妹に投げ付けたといふやうな、些細な点までが尚残つて居る。さうして北は青森県の淋しい村から、南は宅岐島の海端にまで、数多く分布し且つ今も生きて居る。英国のシンドラ研究者ミス・コックスが、若し此事実を知つて居たならば、彼女の記念碑的名著も必ず若干は其体裁を改めて居たことゝ思はれる。故厨川白村君などは、日本に彼女の目の届かぬ一隅があることに心付いて、柳田の如きはなぜ早く之を説かうとせぬかといふことを、曾て大阪朝日紙上で注意せられたこともあつたが、実は其頃まではまだ私なども、さう大きな問題とも思つて居なかつたのである。それに国内の蒐集が、一向に進んでは居なかつた。今とても決して豊富と

は言はれぬが、兎に角に新たな材料によつて、其後明かになつて来たことが幾つかある。文学即ち記録文芸の上では、此話は普通に紅皿欠皿の名を以て知られて居る。馬琴の皿皿郷談などは全く之に由つたもので、話を美作の久米の皿山の歌に結び付けたのも、彼が独創に出でたる趣向では無かつた。今ある住吉落窪の物語を始として、日本に最も数の多い継母話の原の種も、恐らくは之と無関係に生れ出たものでは無かつた。独逸のグリム研究者たちが、日本の類話として採録して居るのは、御伽草子の鉢かつぎ姫たゞ一つであるが、是も姥皮とか蟄の皮とかの形になつて、弘く民間に行はれて居る。独逸では之をアルレイラウフ（千枚皮）、仏蘭西ではボーダアス（驢馬の皮）、英国では又キャッツスキン（猫の皮）などと称へて、共に灰かつぎ姫譚から派生した一旁系であることは、コックスも既に之を述べて居る。たゞ彼等は我々の草子以外の文芸を、知るべき機会をもたなかつただけである。

日本民間の口承文芸に於ては、シンドレラは奥州南部の糠子米子、又は津軽の粟袋米袋等の名を以て伝はつて居る。是と並び行はれて居る多くの継子いぢめの話で、姉妹の名前がお銀小銀、又はお月お星だの草子萱子だのと、二つ相對するものゝ名になつて居るのも、すべて紅皿欠皿の系統を伝うて、やゝ目先きをかへようとしたものらしい。しかも其継子のシンドレラが台所へ追ひ下され、始終火焚き番をして灰まみれの汚ない衣を着て居たといふ点は、まだこの温暖の国に来て、脱ぎ棄てゝは居ないのであつた。今まで此説話の研究者たちが、大切な分類の標準にして居た一つの点は、幸運な心がけのよい美しい継娘を保護する者が、或一つの動物であつたか、亡くなつた実母の霊であつたか、はた又当人の守り神であつたかで、此特徴の異同によつて、個々の民族の伝承する説話の親疎、伝播の経路を尋ねることが出来る様に考へられて居た。ところが其方法の頗る心もなくなつて来たわけは、日本にはまさしく右三つの型が共に現存するからであつた。前の目安を信頼するとしたら、斯邦へは三口別々の隣国から、前後して持つて来たといふ結論になるので、そんなことは容易に信じ難い。だから尊敬する外国の篤学者でも、折々は誤つたことをいふものと承知しなければならぬ。それといふのが渉獵は広くても、一つの国民からさう幾つもの資料は得られず、得られたものだけに由つて一応は意見を述べようとするからで、従つて誤謬は始から新資料の発見によつて、訂正せられる様に出来て居るのである。その受売ほど愚劣なことは無い。是からもどんな変つた標本が出て来ぬとは限らぬが、兎に角に日本での採集によつて知れて来たことは、この世界的に著名なる一つ

の昔話が、我邦に於てもまだ比較的まとまつた形で保存せられて居たことゝ、それが継母話の稍残虐に過ぎたる一種を発生せしめた以外には、特に他の多くの説話の上に、是といふ影響感化を与へては居なかつたらしいといふことゝである。

二 民譚二種

それから今一つ、欧羅巴では可なりもてはやされて居る昔話に、古風なる死人感謝譚（ルモールルコンネッサン）といふのがある。或は又歌うたふ骸骨とも謂つて、其死人が髑髏になつて歌つたり過去を語つたりしたといふ話が多い。是なども日本靈異記の昔から、よく纏まつた形で久しい間、弘く我々の中には伝承せられて居た。私は此事実を解して、此種の説話が夙く神話信仰の時代を去り、一個言語の芸術となつてしまつてから後に、この日本民族の間に運び込まれたことを、意味するものであらうかと思つて居る。勿論それを断定する為には、まだ／＼数多くの類例を集積して見なければ安全で無いが、少なくとも今日御互ひが一括して昔話、もしくは民間説話と名けて居るものゝ中に、斯ういふ國際的類似の著しい若干がある以外、是と対立して国内限りで、思ひ切つて変化をして居るものがあることは事實である。是は一般の芸術発生の法則とも關聯して居るものであらうが、説話には兎に角其成熟期とも名くべきものがあつて、個々の風土環境と社会生活の段階により、乃至は説話そのものゝ各自の性質から、国毎にちがつた年齢をもち、ちがつた経歴を持ち、従つて其伝播の様式にも、幾通りかの差異が有り得たのである。大体に是を輸入の時代の前後と言つてしまへば解りはよいだらうが、中には遅く持つて来ても尚芸術となり切つて居ない方面から来たものもあらうし、他の一方には早く入つたものにも既にこの成熟期を過ぎ、熟した果実として受用せられたものも有り得るのである。我々の灰娘や歌うたふ骸骨などは、ちやうど此第二の場合に属して居た故に、その渡来後の変化が案外に少なかつたのでは無いかと思ふ。

是とは反對に、西洋でも数多く知られて居る異類求婚譚（ラベルエラベット）、即ち人間の美女又は美男と、鳥獸草木などの人で無いものが縁を結んだといふ昔話などは、日本一国の内に於ても非常な変化発達を遂げ、しかも其経路が今も尚

大よそは跡づけ得られる。たとへば幼少な者が笑ひそぐろいて聴く猿轡入のおどけた話から、遠くは三輪山箸墓の伝説と、筋の続きを認められる敬虔な或旧家の昔語りまで、現に其進化の中間の十数階段が、地を接して同時に併存して居るのである。神話に関する学問は、将来この採集が進み比較が容易になり、同時にどれが古く、どれが新らしく其次に變つたのかを測る為の、一定の尺度が具はるに至つて、徐ろに改造せらるゝことゝ私などは信じて居る。今日の所謂神話学は、言はゞ今集まつて来た民間説話の中に、交つて伝はつて居る神話的分子を取扱つて居るので、必ずしも神話でも無い昔話を研究の対象として、是が神話であると強弁しようといふのでは無いが、たま／＼二者の分界を明かにすることを怠つた結果、何だか異様な言葉の用ゐる方、たとへば国の歴史を神話と言つて見たり、さうかと思ふと桃太郎やかちかち山の類までを、神話の大系にさし加へたりする者を生じたのである。語原から言つても、神話（ミート）は本来神聖なものであつた。定まつた日に定まつた人が定まつた方式を以て之を語り、聴く者が悉く之を信じ、もしくは信ぜざる者の聴くことを許されぬ古風の説話であつた。それとこの退屈な時に又は人が耳を楽しましたい時に、随意に所望し得た話の芸術と、二者が類を同じくせざることは誰にでもわかり切つて居る。たゞ耶蘇教国の人々だけは、従来文化は平押しに、新しいものが進み古いものが退いたと解して居た故に、説話時代の神話を認めることが出来ず、ましてや神話時代にも既にあつた民間説話などは、之を想像して見ることも出来なかつた。さうして昔話が神話の孫子であることをのみ、たゞひた向きに信じたがつたのであるが、仮に孫子であつたとしても、同人で無い以上はちがつた閱歴を持つて居る筈である。だから之を混同してよろしいなどゝは一人だつて言つては居ない。他に方法が無いなら是に由つて、彼を尋ねようと言つて居ただけである。

ところが我々の生れた国に於ては、今でもまだこの二つのものが、それと因縁の深い「伝説」と、三つ巴になつて交錯して居る。勿論その三つの中でも神話だけは、数も少なく出現の機会も稀であり、又非常に荒れすさみ且つ不純になつて居るが、兎に角に是から伝説と民間説話へ、移り動いて往つた足取りだけは見られる。それにはこの異類求婚譚、其中でも殊に蛇の轡入の話などが、可なり豊富に手頃の材料を供するかと思ふ。私は此説話を整理する為に、婚姻習慣といふ一つの物差しをあてゝ見ようとして居るが、同時に又その多くの類型の比較は、我々の婚姻制の変遷を解説せんとする者に、幾つかの暗示を投げてくれる様である。

三 童話の起り

桃太郎の昔話なども、日本に根を生じてからよほど年久しいと見えて、其樹は何代と無く生ひ代つて、もう本の株は枯れて居る。従つて神話時代の桃太郎原型は、蛇鰥人譚の如くには我々の目に触れる処に残つて居ない。其代りには又一方の糠福米福などゝもちがつて、近世に入つてからの変化が最も著しく、その色々の形が隣を接して併存するが為に、之に基づいて此口碑の永年に亘つた経過を、大体は推測することを許されて居るのである。私などの見た所では、この昔話成長の三つの変化、即ち、

一、説話が上代に於て夙く芸術化し、そのやゝ成熟した形に於て弘く流伝して居たもの、たとへば死人感謝譚や紅皿欠皿話

二、説話の信仰上の基礎が全く崩壊せず、従つて之を支持した伝説は素より、その正式な語りごとが尚幽かながら残つて居たもの、たとへば蛇鰥入の如き一部の異類求婚譚

三、最後に説話が近世に入つて急に成熟し、元の樹の所在は不明になつたが、まだ其果実の新鮮味を失はぬもの、たとへば桃太郎瓜子姫説話の類

斯ういふ二種類三様式の説話が、入りまじつて共に行はれて居るといふことは、比較研究者にとつて此上も無く便利なことである。グリムも伝説の若干は集めて居るが、それはもう痕跡であり、又彼の家庭童話とは関係の無いものであつた。説話が近い頃まで信じられて居た島々はあるが、それも白人が近よつて来た頃から、一時に悉く娯楽用のものにならうとして居る。斯んな色々の標本の揃つて居た国は、日本以外に決してさう多くは無いといふことは、やがて世人が心付く時が来るであらう。

日本は果してさういふ国であつた。殊に近世の二百年ばかりの文明が、さういふ状態を作り上げるのに適して居た。江戸

期から明治の中頃までにかけて、都市の生活のみが独り大いに進んだのみならず、又其中でも一部の者と、村に住するごく／＼の少数だけが文字を知つて居た。読書階級は殆ど別種族の觀があり、新たなる普通教育は單に其生活を、成るべく多数の者に模倣せしめようとしたに過ぎなかつた。事實大部分の俗衆は残されたる者として生活して居た。文芸に対する態度も明かに二様あつた。たとへば演劇の歴史として今伝はつて居るものは、僅かばかりの所謂見巧者の記録であつて、此以外に別に舞台に躍り上つて、赤面の役者を斬らうとした田舎武士の逸話さへあつた。町にも亦最初から泣くつもりで、鼻紙を多量に用意して行く芝居見物人が居た。井沢蟠竜軒の広益俗説弁などは、中古以来の語り物や説話を多く掲げて、悉く是れ小説なり信ぜばからずと弁じて居る。即ちさう訓戒しないと信ずる人が多かつたのである。或は是が足利時代からの、諸道の職人と百姓との別れ目であつたのかも知れぬが、兎に角我々の一つ前迄の社会には、何でも茶にしたり趣味にしたがる人々と、たゞ生真面目にしか物の見えぬ人々とは、相對立して生を営んで居たので、今日は只其一方からの觀察だけが、文献として伝はつて居るので、農民芸術は全く別の足取りを以て進んで居た。此二種のものゝ融合が、珍らしい世相の混亂を生じたことは、ちやうど冷温二つの潮流の行き逢ふ海に、ガスが立つのも同じわけであつた。

其中でもたゞ名前ばかりでは見当の付かぬものに、此頃よく使用せられて居る「童話」といふ語がある。日本では口承文芸の童話化といふことは、どう考へて見ても古いことでは無い。少なくとも子供の爲の話又は子供に向く文芸、そんなものは元は村には無かつたと思ふ。子供の遊びは本来が自治であつた。彼等自身の能力にかなふ発明と保存、それよりも盛んであつたのは模倣である。前代の大衆教育は一般に、ちやうど今日とは正反對の傍觀傍聽主義であつた。成人の言ふこととする事の中から、各自の年齢に應じて学び得るものだけを汲んで居た。だから又今よりも早く一人前になり得たのである。併し幾ら昔だつても子供は話をせがんだであらう。だゞを捏ねれば爺婆はすかさうとしたであらう。彼等ばかりとの会話は平易であつたらうといふ人が有ると思ふが、それは其通りとした所で、其為に話は作ることが出来ない。何となれば話は話す人の持つて居るものだけ、曾て自分も聴いたことのあるものより他には、話すことが出来ないのが普通人の技能であつたからである。童話の根原は要するに選択より以上の何物でも無かつた。沢山ある昔話の中から、比較的に子供に似合はしいものを先づ話すといふのが精々で、それも効果の利不利よりは、寧ろ理解の容易なものを採らうとした。是が今日の童話といふも

のゝ起りと言つて、多分誤りは無いと私は考へて居る。

但しこの選択者の心理の上に働いた外部の事情が、更に三つほどは算へられる。其一つは話術の進歩を促した力の変化、即ち子供だけが聴衆だと考へる時に、用語を解し易くするは固より、更に又叙述の省略と敷衍とが行はれたことである。併し是は子供に対してだけで無く、話術は元來がさういふ風に、いつも聴衆の顔色によつて影響を受けるものであつた。たとへば色町の話はなまめかしく、軍談は騒々しいものとなつたのも、聴く人柄が知らず識らずのうちに、話す人の上に働きかけて居たのである。第二には話者に今日の作家の様な特別の準備が無くて、常に自然の印象と記憶力とによつて動かされて居たことである。家庭の昔話の管理者は通例は女性であつた。母ならば二十何年前に、婆ならば又五十年ばかりも前に、曾て自分の面白く嬉しかつた記憶が、子供の智恵付くを見て復活する。たゞそれだけが御伽の資料であつた。従つて話者聴者の世代を重ねる程づゝ、興味は追々に大人のものから、子供のそれに移つて行くので、いつの間にか話の要点がかはり、たとへば桃太郎でいふならば、割れて赤ん坊が飛び出したところ、又はどんぶりこんぶりと桃の実が流れて来た個条などが、中心かと思はれるやうになるのである。即ち大人や青年がそんなものはつまらぬと思ふ時代が来ると、別に童話にしようといふ氣が無くとも、昔話は次第に子供らしくならざるを得ない。是が又案外に古風な説話の、小児の間ばかりに保存せられて居た理由である。

四 童話と其記録

さういふ中でもまだ大人たちの間に、若干の昔話の交換が行はれて居る限りは、児童は又それをも傍聴して、始終二通りの種類を知つて覚えて居たのである。ところが更に第三の事情として、夜話の衰微といふことが重要であつた。以前古い話を聴く機会であつた庚申や日待の晩に、人がもう徹夜をする元氣も余裕も無くなると、却つて昼日中そちこちに立ち淀んで雑談に耽る風は多くなつたが、是にはもう昔話のやうな長いものは出て来なかつた。それから一方には少し押売りの嫌ひも

あつたが、年長者が自分の知つて居ることだけは、是非とも語り残して行きたいといふ氣持、是が書籍の増加と反比例に、追々と遠慮深くなつて来て居る。以前は此念慮は一般に今よりもずっと強かつた。だから聴いてくれる人があれば、それを懐かしがり愛したのである。さういふ篤志者が一人去り二人立退いて、しまひに残されたのが子供だけ、それも熱心にもつともつとゞ注文するのは、概して小さい者ばかりになつてしまつた。我々の昔話は急劇に童話化せざるを得なかつた次第である。之を要するに是等外部の事情變化がもし無かつたら、我々の民間説話は決して此頃のやうな形にはならなかつた。昔も仮に童話協会の会員といふ類の人が参与して居たならば、無意味なたわいの無い御話が、もう少し数多く出来て居た筈であるが、事實は正に其反対であつた。同じ話をさう度々は聴きたがらぬ兎、話を貪る子が少しせがむと、其次に出て来るのは大抵は「為によくない話」であるのみならず、子供専用の如く心得られて居るかち／＼山でも、又は瓜子姫でも、其内容は既に甚だ殺風景なものであつた。是を小児の為に最初から、支度せられたと見ることは不可能である。しかも現代の作家たちはそれをさうかと思つて居る故に、自分等のすることの方が確かに改良進歩だといふ、誤つたる自信を得るのである。二つの者は全く別のものだ。是を童話といふ一個の名詞で、包括して居たのがそも／＼間違つて居る。

私はこの近世の経験に徴して、更に又神話が後々の昔話となる際にも、やはり大よそは是と似た外部事情の感化を受けて、一種の選択が行はれたものと想像する。それだから固有信仰のまだ生きて働いて居た時代の名残が、その僅かに残された破片の中からも、見出されるのでは無いかと考へて居る。此想像が誤まつて居なかつたら、爰にも亦一つの芸術と宗教との交渉点が、将来の考察者の為に保存せられて居たわけである。我々の固有信仰が、儒仏その他の外来思想の影響を受けて、少しづつ移り動いて居た間に、何かまだ明かになつて居らぬ動機に由つて、古い言ひ伝への或ものは形を損じつゝも永く残り、他の或ものは夙に文芸化して、興味を以て常民の間にもて囃され、それが後更に都市の風雅階級に入り込んで、又別様の取扱ひを受けるに至つたことは、さう大きな面倒無しに誰にでも認め得られる。たゞ不思議と言つてもよい一つの事實は、多くの文人たちがいつも伝統の拘束を受けて、未だ曾て文学を以て、無より有を生ずるの術とは考へて居なかつたことである。彼等の想像力には眼に見えぬ縁緒が附いて居た。さうして自由奔放にさう遠くの空を飛び翔ることが出来なかつた。鶯が春に啼き雞が天明を期して高く唱へたやうに、詩歌物語にもそれが出現すべき場合は予定せられて居たのみか、更に其言

葉のもつ意味以上に、別に隠れたる聯想の快い興奮の原因となるものがあつて、それが又至つて素朴なる前代の生活に筋を引いて居たのである。芸術を天才の独創と解し、乃至は各期の社会生活が之を生むと説く者には、是はたしかに厄介なる不思議だ。之を何でも無い当然の出来事だと心付く為には、やはり我々の子供らしい桃太郎を、頼んで来なければならなかつたのである。

今日の所謂五大御伽噺が、書冊の力を以て略現在の形に結集せられたのは、江戸期も半ば過ぎに出来た「雛乃字計木」といふことになつて居るが、あの頃は支那の小説類まで翻譯せられて居た時代で、何を書いてよく又何と改造しても自由であつたらうに、實際は新聞の雜報などと同じ程度に、大よそあの頃に於ける都市の昔話の退歩した状態を、有りのまゝに映写して居る。しかもそれが今日の標準型として、さも／＼大昔から此形を以て伝はつて居たかの如く、多くの人をして信ぜしめたのは、全く文字の魅力とも名くべきものであつた。記録はたゞ単に筆者の居た時と處とに、さういふ話し方もあつたといふことを知らしめるのみで、二つある場合に古い記録の話の方が古いとも言ひ切れないことは、宇治拾遺物語と醒睡笑と、二つの瘤取り話を比べて見たゞけでもわかる。この兩度の採集の中間には四百年ばかりの時間が挟まつて居る。同じ一つの昔話は一方に誰かの手によつて文字になつて居ることも知らずに、尚此様な久しい歳月をどこかに前の形を以て保存せられて居た場合もあつたのである。五大御伽の名称は明白に誤つて居た。是はたゞ数多い昔話の一つの、偶然に筆とる者の耳にとまつた、小さな変化の一例といふに過ぎなかつたのである。此中でも花咲爺などは比較的その沿革がよくわかつて居る。是は昔話の最も有りふれた形で、我々の仮に隣の爺型と名けて居る種類に属することは、前にいふ瘤取なども同じである。幾ら一生懸命に真似て見ようとしても、生れつき備はつた福分をもつ者、又は心がけがよくて神に愛せられて居る者にはかなはないといふことを、裏表二つの極端を並べ説いて、効果を挙げようとした話であるが、是に亦色々の小別があつて、犬を大切に飼ひ育て、莫大の財宝を得たといふものにも、黄金小犬の如くたゞ金の粒をひり出したといふのと、真似する唱へごとの幾つかある複雑なものがあり、何れも皆其小犬の出現と成長とに、元は奇瑞の中心を置いて居たことは桃太郎と似て居る。ところが花咲爺には其点がもう省かれて居て、しかも枯木に花を咲かすといふだけは違つて居るが、灰を蒔くといふ所までは越中の灰蒔爺、奥州の雁取爺と同じだから、その前後の整うて居る後の二者よりは新らしいことがわかる。それ

から終りの殿様に尻を斬られたといふ部分は、今一つの隣の爺型の尻ひり爺と共通であるが、是も尻ひりの方には土地によつて古い形があり、もとは山の神との交渉を語つて居た話であつた。それを忘れてしまつた花咲爺は、此等の爺話の片端を切つて繋いで、後に結構したものと断定して、大抵は間違ひが無いのである。

五 赤本の災厄

それから又かち／＼山、是は三種の昔話の継ぎ合せといふことがはゞ証明し得られる。其中でも智謀に富む兎が愚直なる狸を欺き苦しめるといふ一条は、世界共通の動物説話の、殊によく知られて居る部分で、爰ではたゞ狸が其様にまでひどい目に遭はされる理由を、爺の名代の仇討とした点がちがつて居るのである。最初其狸が爺に捕へられた事情なども、近頃は至極手短かに述べることになつて居るが、以前は是が又纏まつた一つの御話であつて、要点は石の上に竊を塗つて置くのを知らず、いつもの如く其石の上に登つて、爺婆を悪口しようとして失敗したことになつて居た。さういふ愚な狸が中途に於て婆を誑き殺し、其婆に化けて爺の帰りを待受けて居たなどいふことは、少し考へて見れば不調和は争へないが、此部分が亦北欧の赤頭巾物語と対照すべき、我々の瓜子姫譚の骨子であつた。たゞ彼には「糠屋の隅を見よ」といふことを、家の雞が鳴いて教へたに反して、これでは狸が自らさう謂つて遁げ去つたといふ点を異にするのみである。この三通りの昔話は、今でも独立して方々の田舎には行はれて居る。かち／＼山は単に之を省略し且つ綴り合せたといふ以上に、是といふ変化は加へて居ないのである。

次に舌切雀と猿蟹合戦とであるが、この二つだけは或は古くから、斯ういふ纏まつた形で伝はつて居たのかと思つて居ると、それがやはり少しづつ怪しくなつて来たのである。雀報恩譚は朝鮮にも有るといふ瓠の米、柿の種の方は猿蟹との餅争ひなどから、筋を引いて居ることは明かであるにしても、たゞそのみでは話が此様に展開するわけは無かつた。それには他に今一つの系統の是に参加した昔話があつたことは、強ひて物々しい弁証推理を備はずとも、唯追々の採集資料のみに由

つて、自然に判明しようとして居るのである。今日はまだ何人も心付いて居ないやうだが、雀と蟹との二つの御伽噺は、相互にも関係をもち、又桃太郎の話とも似通うた点が若干ある。少なくとも桃太郎一つの成長過程を詳かにすることによつて、他の二つのものが今の形に変化して来た理由も、説明し得られる様に私だけは信じて居る。それで何れの側面から考へて行つても、結局は同じ処に落付くのかは知らぬが、同じことならば目今比較の材料が稍豊富で、手を空しうして今後の報告を待つて居なくとも、或程度までの仮定が立てられる部分から、少しづつ此問題に近づいて見ようとして居るので私の目的は、弘く民間説話の世に伝はり、又案外に改作増補を受けずして、今まで保存せられて居た事情を知るのを第一段とするのである。

今ある桃太郎童話の言ひ伝への中で、どの点とどの点とが特に昔から重きを置かれて居たかといふことは、勿論人によつて見方も違ふであらうが、少なくともその個々の要素には、類例の多いものと稀なるものと、国の内外を通じて分布の広いものとさうで無いものと、非常な差等のあることだけは認められる。たとへば桃の実が割れて中から子が生れたといふことは、日本の桃太郎以外には無いらしいに反して、犬や其他の動物に援けられて、大きな仕事をした話は他国にも多い。犬が猫を嚇し猫が又鼠を駆使して、紛失した宝物を見付けさせたといふ話は我邦にもあり、西遊記の三蔵法師までが、犬猿猪の半ば人間の形をしたのを伴につれて遠征し、途々色々なくじりや仲間喧嘩のあつたことを笑話の種にして居る。遠い諸民族の間にも此点は相似たるものが多いが、其中でも羅馬の博物館などに幾つも陳列せられて居るミトラ神の石像などは、猛牛を退治して居るのは桃太郎同様の少年であり、之を援けて居るのは犬と蝸とであつて、何人が見ても是を動物忠誠譚の古くから世界的であつた証跡と感ぜずには居られぬのである。説話の英雄が隠れたる約束により、もしくは恩義に報いんとする動物の助勢を受けて、非常な難事業に成功したといふことは、兎に角に日本ばかりの伝承では無かつたのである。

日本の特徴といふのはたゞ其英雄の名前であり、又其出現の様式であつた。桃が川上から流れて来て其中に赤児があり、それで桃太郎と名を付けたといふ点ばかりは、近い地域にも其類似のものを発見せられて居ないから、多分は我邦に於て新たに出現したものであり、従つて同胞国民の間に、其原因を探り求むべきものであつたらう。見遁すことの出来ない一つの事實は、此点が兼て我々の固有信仰の、可なり大切な一つの信条であつたことである。玄同放言などには和漢の多くの書

を引いて、桃の中から桃太郎の生れる原理のやうなものを説明せんとし、それに推服した人も折々あつた様だが、仮にそんな想像が正しかつたとしても、實際は大したことで無かつた。不思議な赤ん坊は必ずしも常に、桃の中からばかり飛出して居たのでは無いからである。瓜子姫の昔話は少なくとも桃太郎と同時に併び行はれ、九州中国にも稀に伝はり、東日本は殆ど到处に保存せられて居た。たゞそれが文筆の士に採録せられなかつた故に、人が久しく是に心付かなかつたゞけで、其代りには又所謂五大御伽噺に見るやうな、新奇なる潤色を受けずにも済んだのである。

六 桃と瓜

奥州に行はるゝ瓜子姫などは、其発端がよほど竹取のかぐや姫と近くなつて居て、末は今一つの可なり重要な説話に繋がつて居る。紫波郡の例を見ると、爺と婆が嫁入支度を調へに町に行つた留守に、瓜子姫は一人で佳い音を立てゝ機を織つて居る。そこへ山姥がやつて来て作り声をして、指の入れるだけでよいから戸を開けるといふ点は、グリムの狼と小羊やペロールの赤頭巾などともよく似て居る。此山姥は他処ではアマノジャクともなつて居るが、それが姫を殺して小豆餅をこしらへ、自分は姫に化けて其餅を還つて来た爺と婆とに食はせ悪口を言つて逃げて行くところは即ちかち／＼山であつて、別の多くの例に於ては雀鴉又は雞が啼いて事実を親たちに教へ、即座にアマノジャクは復讐せられたことになつて居る。姫はそれと同時に多分復活するといふのが本の話し方であつたらう。今でも樹の梢に縛られて居たのを、助けおろされたといふ風に話す例も少なくは無い。

さてこの大きな瓜と大きな桃、それが水上から浮いて流れて来たといふことは、小児には素より感じのよい言葉には相違ないが、要点は寧ろ「大きな」といふことでは無かつたやうである。元は恐くは桃の中から、又は瓜の中から出るほどの小さな姫もしくは男の子、即ち人間の腹からは生れなかつたといふことゝ、それが急速に成長して人になつたといふこと、私たちの名けて「小さ子」物語と言はうとするものが、此昔話の骨子であつたかと思ふ。後世の所謂一寸法師、古くは竹取の

翁の伝へにもそれは既に見えて居るのみならず、諸社根元記の載録する倭姫古伝の破片にも、姫が玉虫の形をして宮の中に姿を現したまふといふことがあるのである。それから今一つは水上に浮んで来て、岸に臨む老女の手に達したといふこと、是が又大切な点では無かつたかと思ふ。海から次第に遠ざかつて、山々の間に入つて住んだ日本人は、天から直接に高い嶺の上へ、それから更に麓に降りたまふ神々を迎へ祭る習はしになつて居た。だから又谷水の流れに沿うて、人界に近うとする精霊を信じたのであつた。賀茂の瀬見小河の丹塗矢、出雲の加賀窟の黄金の箭も共にそれであつて、其結果は戸の隙間からさし入つた日光の金線が、人間の少女の身を射た場合と同じかつたのである。桃太郎の桃が瓜子姫の瓜よりも後のものであつたことは、さう多くの憶測を借らずとも容易に之を認めることが出来る。瓜類が中うつろにして自然に水の上を浮き漂ふ事實は、非常に我々をして其内に在るものを床しがらせて居たのであつた。後世のうつろは舟説話を成長せしめた元の起りには、新羅の朴氏の始祖が瓠に乗つて、日本から渡つて来たといふ様な例もある。是と白麁かきの皮で作つた舟に乗り、鴈の羽衣を着て、潮のまに／＼流れ寄つたといふ我々の小男神の物語とを比べ合せて見ると、最初異常に小さかつたといふことが、其神を尊く又霊ありとした理由であつたことは察し得られる。

是が桃太郎の鬼が島征服の話と、複合するに至つた主要な点のやうに私は思ふ。独逸の人たちは人文神などといふ語を設けて居るやうだが、我々の説話の上代の英雄にも、彼と共通した運命の前提があつた。常人すら尚到底企て難しとする難事業を、始めは普通以下の如く見えた者が、何の苦も無く安々と為し遂げた。是れ奇瑞であり是れ天意で無くして何であらう。乃ち一種族の幸福を指導するの力が有つたのも偶然で無い。故に伝ふるに足る。又伝へざるべからずといふ考へ方を、昔の人たちはして居たらしいのである。だから重細重でも欧羅巴でも、現在知られて居る英雄の成功譚には、単に小さくて弱々しい者であつたといふ以上に、非常な貧乏人であり、極度の情け者であり、又は少なくとも外見には法外な魯か者でもあつた。この四つの条件の二又は三を兼備して人から省みられなかつた者が後に偉い事をして居る。是をたゞ桃や瓜の中から飛出したといふだけにしたのは、我々の方の単純化であつたかも知れない。兎に角に国内に瓜や鶯の卵や竹の中から出た例も有ることを知らずに、無暗に子供のやうに桃といふたゞ一つの特徴を把へて、桃の話ばかりを搜して見ようとしたのが、玄同放言と其随喜者たちであつた。そんな比較などはして貰はぬ方がよつぽど好かつた。

七 妻もとめ

比較をする位ならば異なつて居る点も考へて見なければならぬ。たとへば遠征の目的の如きも、日本の昔話の方はやはり単純化して居る。西洋の「桃太郎」たちの大旅行は、必ずしも財宝を持つて還るといふ為ばかりで無かつた。寧ろそれを手段としてよき配偶者とよき家を得、更に佳き児を儲けて末永く栄えんとして居るのである。我々の側でも瓜子姫だけは、この幸福なる婚姻を以て結末として居るものがあるが、あちらでは男性の冒険者も、同じくその珍らしい宝物を持つて来て、終に王様の智となつた話が多いのである。察するに近代の桃太郎は子供を主人公にしたといふよりも、寧ろ子供にのみ聴かせる話であつた為に、計画を以てこの重要な妻覓きの一条を省いたのであつた。奥州民間の桃の子太郎といふものには、地獄から手紙を以て鳥が来たので、此遠征を思ひ立つたといふのがある。さうして黍団子を携へて行つて地獄の門番の鬼を懷柔し、地獄のお姫様を連れて逃げて来る。それを大鬼が火の車で追うて来るといふなどは、頗る亦御伽の御曹司島渡りとも似て居る。桃の子太郎の桃は夫婦の者が花見に行つて居た折に、女房の腰のあたりに転がつて来たことになつて居るが、それと近い昔話にはスネコタンパコといふのもあつた。即ち子を禱る女房の脇から生れたといふ親指の頭ほどな小さき子であつて、是も長者の娘を嫁に貰ひに行つたといふことが、かの一寸法師の草子と共通の話し方を具へて居る。信州木曾の小さき子塚の伝説といふものは、既に破片となつて元の姿を究め難いが、あまり小さいので臼に入れて育てたといひ、或は笠の蔭に蔽はれて見えなかつたといふことだけは残つて居る。ところが是が我邦の神子譚の、至つて古い形であつたと見えて、九州にも又東北のそちこちにも、神に禱つて授けられた申し児が、笠の中に蟠かまつた小さな小さな小蛇であつた昔話が伝はつて居る。是も大きくなつて妻求めをして長者の家を訪問することは、他の多くの蛇蛭入話と同じきものがあり、終りに花嫁の力によつて壮麗なる人間の若者の姿に復したと言つて居る。書伝は之を逸して既に年久しいけれども、我々の祖先の間には此説話は曾て弘く流布して居たらしいのである。大和の三諸岳みつもろだけの霊神との因縁を語り伝へて居た小子部連氏こむすべのむらじは、其家

名の由来として別の説を録進して居るが、日本靈異記の最初の教条を読んで見ると、同じ語部は又頭に蛇を纏はせた靈童の誕生をも説いて居て、上代の小さ子譚を管理した者は、此家も亦その一であつたことが察せられる。私は曾てこの問題を細叙して、古伝も時あつて信ずべからざる場合があるといふ説を立てた（参照「民族」二巻四号。若宮部と雷神）。それはまだ十分なる論拠とは言はれぬが知らぬが、少なくとも小さ子出現の昔話は古かつたのである。

それから尚一方の惰け者と貧乏人とが、美しい上臈を妻に獲た話、是も同じく太郎といふ名を以て日本に行はれて居る。

古い記録では物草太郎の草子、枕もとの団子も拾つて食はうとせぬ位のヅク無しであつたが、後によき妻を得、且つ立身して更に神となつた。隣の寝太郎を簪にとれといふ話などは、私たちも小さい時から聴いて居るが、周防ではそれが寝太郎荒神の縁起と化して土著して居る。沖繩では是とよく似た話が遺老説伝に出て居り、更に溯つて宇治拾遺の「あめが下のみめよし」などは、二目と見られぬ面をしたならず者であつた。是が何れも皆安々と長者の簪になる話であつて、言はゞ身に負はぬ大望とその案外な成就とが、よほど夙くから説話興味の中心をなして居たのである。此方の類例ならば外国にも幾つかを見付け得られる。勿論笑話となつてからは之をもてはやした動機も變つたらうが、何にもせよ是だけの結構を敢てし得ざる人々が、既に話の趣意を忘れてしまつても、尚久しく之を語り伝えて居たのだから、其一つ以前の起りといふものが無くてはならぬのである。西洋の学者たちには、非常な労苦を以てこの根源を突留め、且つ之を証明しようとして居る人も多いやうだが、氣の毒ながらあちらにはもう其資料が乏しくなつて居る。之に反して我々の方では、まだ幸ひに同じ母語の圈内に、色々の比較に供すべき活きた昔話をもつて居る。活きたといふことは昔話には似つかはしくないが、兎に角純乎たる文芸の目途から、之を改作しようとした者の無かつた話し方が今尚凡人大衆の間には伝はつて居るのである。橋はもう無くとも飛石だけは有る。我々はそれを踏んで神話の彼岸まで渡つて行けるのである。最も簡単な一語で結論を下すならば、斯ういふ昔話の起りは古かつた。即ち或る最高の意思もしくは計画の下には、貧しい大工の女房の腹からでもイエス・キリストは生れ得たと同様に、至つて賤しい爺と婆との拾ひ上げた瓜や桃の実の中からでも、鬼を退治するやうな優れた現人神あらひとがみは出現し得るものと、信ずる人ばかりの住んで居た世界に於て、この桃太郎の昔話も誕生したのであつた。それから以後の色々の変化は、単なる成長であり乃至は老衰であつて、我々はこの一つの生きて行くものに、新たな生命を賦与する力は有たな

かつたのである。

八 昔話の本の姿

此推定は今はまだ大胆と評せられるかも知れぬが、之を側面から証明し得る資料に、前にも一言して置いた蛇智入譚、即ち説話流伝の第二の様式によつて、固有信仰の推移の幾つかの階段に在る口碑と併び行はれて、今も其間に細かな比較を許さるゝ説話がある。我々の「桃太郎」は幸ひなことに、是とも若干の聯絡をもつて居た。神が小蛇の形になつて、人間の美女に求婚したといふ話は、上代の百襲止々媛の記録にも残つて居る。即ち錦の文ある小さな蛇が、女のたつての望にまかせて、櫛笥の中に其姿を現じたといふので、其神がやはり小子部連の祖が迎へ申したと称する三輪山の後の高山、三諸岳の大蛇たる大物主であつた。是などは明白に神が小蛇の姿になつて現はれたので、蛇が神として拝まれて居たのでは無かつた。単に人間の娘には蛇としか見えなかつたといふだけである。然るにそれを唯霊ある蛇体が、人の美しい少女を恋ひ慕ふものと解するやうになつて、次第に我々の忌みは怖れとなり、之を災難の如く厭ひ避けて、終には祈禱や武勇の力を以て、撃退し又は報復したといふ伝説を生じ、更に一方には臼を負うて水に墜ち沈み、あはれな辞世の歌を詠んで流れたといふ、猿智入の童話をさへ生ずるに至つた。是れ疑ひも無く此国人の信仰の変化の痕であつた。

この美しい錦の小蛇といふ想像の起りも、私たちに略わかつて居る。是は今でも稲妻の名を以て呼ばるゝ電光の形から、之を太陽が此世に通はうとする姿と考へるに至つたので、或は黄金の箭とか丹塗りの矢によそへたこともあつたが、實際に天から人界に降つて来る火の線は、蛇のやうにうねり又走つて居たのである。次にはその光の蛇が妻を覓めんとした目的も、日本でならばまだ跡づけ得られる。即ち人界に一人の優れたる児を儲けんが為、天の大神を父とし、人間の最も清き女性を母とした一個の神子を、此世に留めようが為であつたらしいのである。蛇智入説話の一要素、一方是が又伝説の中心として、意外に年久しく信ぜられて居た一点は、当の本人の妊める少女、もしくは其血族や従者が立聴きをしたことであつた。竜蛇

は鉄針の毒に苦しみ悶えつゝも、もはや人間に胤を残したから、死んでも憾みは無いなどうめいて居たといふのは、痛ましい古信仰の衰頹の影であつたが、しかも伝説の場合に於ては、之を保管する者は必ず其美女の出た家、即ち水の神に奉仕した神官の家であつた。彼等の何人かゞ立聴きをしたと言はなかつたならば、所謂蛇智入の神秘なる理由は、人間社会に知られ且つ伝はらない筈であつた。今日の伝説は通例外部の噂として流布して居るのであるが、私どもの経験では其家でも多くは之を否認せず、又必ずしも恥ぢたり迷惑に思つたりしては居ないやうである。今ならば到底有り得ないさういふ不思議な話が付き纏うて居るのも、つまりは家が古く且つ土地との関係が深いからだ、人も解し我家でもさう見て居る。又一朝一夕には之を無いものにしてしまふことが出来ぬ位に、根強く且つ一般的なる信仰でもあつたらしいのである。

日本の小公子説話が、最初小さな動物の形を以て出現した英雄を説き、又は奇怪なる妻問ひの成功を中心に展開して居るといふことは、それが右申す如き神人通婚の言ひ伝への、まだ固く信じられて居た時代に始まつて居る証拠として、我々に取つては可なり大切な要点であつた。然るに其点を所謂標準御伽の桃太郎のみが、何の考へも無く取除いてしまつて居たのである。それと同様に一寸法師でも物草太郎でも、日本でならばそれが最後に神と顕はれて、永く祀られたといふわけも判るのであるが、外国の民間説話は之を單なる凡人界の出来事とし、たゞ一個極度の幸運児の立身出世を以て、話の結末を付けることになつて居る為に、もう其起原を究めることが大分困難な様に見受けられる。つまりは多くの昔に神話から分離してしまつて、他にはその聯絡を暗示するだけの、何等の口碑も保存せられて居らぬ故に、仮に見当はついても安全に之を論証する途が無いのである。この意味から言つて、我々はまだ頼もしい邦に生れ合せたと言ひ得る。無暗に洋人の通つた跡ばかり踏んで行かうとさへしなければ、是ほど変化しきつた桃太郎の中からでも、尚之を語り始めた人たちの心持を探つて見ることが出来る。神から送られた我々の濟ひ主は、いつでも変装して居て最初は侮られ、後には必ず奇跡によつて発覚するものと信じられて居たらしいのである。日本での今一つの例としては、山路の牛飼と称する古い歌物語があつて、舞の本の烏帽子折にも記録せられて居る。是は舞の手振が非常に面白かつたと見えて、幾度か後世の浄瑠璃の題材ともなつて居るが、要点は古今大よそ同じであつた。牛に乗つて笛を吹く草刈童は実は天子で、長者の娘を恋ひ慕うて、身を下賤にやつして遙々と都より御下りなされた。八幡の祭の日の流鏑馬に、何人も知らなかつた射術の神秘を御示しなされたら、社殿も是が為

に動揺して、乃ち神よりも尊い御方なることが現はれたと語つて居る。それを用明天皇職人鑑などゝ題したのは、姫を娶つて其間に生れたまふ太子を、日本の太子の中の最も賢明靈異なる、聖徳太子の御事だと推定した結果であつたが、それは歴史とは合はぬことであるが故に、歴史の学問が少しでも進むと、之を改訂して出来るだけ信じ易くした。だから奥州の荊田宮には日本武尊、越前羽後では継体天皇、薩摩や土佐では天智天皇の御逸話と解して、しかも伝説として今も尚之を信じたがつて居る。神が形を錦の小蛇と現じたまひしか否かによつて、末々の口碑は是だけの大きな差異を生じたが、説話の蛇蛭入も伝説の用明天皇も、神が思ひ掛けぬ姿を以て人間に降臨なされたといふ本の意は一つであつた。勿論是はすべて最初は非常に崇厳なる神秘であつて、凡人の決して常の日に口にすべからざる教訓であつたらうが、歌と舞姿とによつて年に一度、其記録を喚び返す日の面白さに引かれて、後に信仰が弛めば人は之を娛樂の用に供した。是が芸術の分立して、独自の発達を遂げた因縁であつたらうと私は信じて居る。酒や美女の紅粉が常の日のわざとなつた如く、祭の日の語りごとは我々遊宴の興を助け、舞は演劇となり、説話は童子の夜睡る前の慰みとまで零落し且つ変化し了つたのである。或は零落といふのは余りに尚古趣味に囚はれて居るのかも知れぬが、少なくとも今は此程度にまで利用の途がかはり、又異なる人々の怡悦の具となつたので、ちやうど太古の偉大なる杉菜つくしんぼうが、今日の石炭になつたのと事がよく似て居る。是は石炭の物理を研究する人には、或は何でも無い事実なのかも知れぬ。併し私の様に杉菜の植物学、もしくはつくしんぼうの自然史を知らうといふ者に取つては、微々たる一片の桃太郎昔話も、尚万斛の感慨を催さざるを得ぬのである。（昭和五年一月、桃太郎の話をしきく会講演）

第3回しずおか世界翻訳コンクール 応募用紙

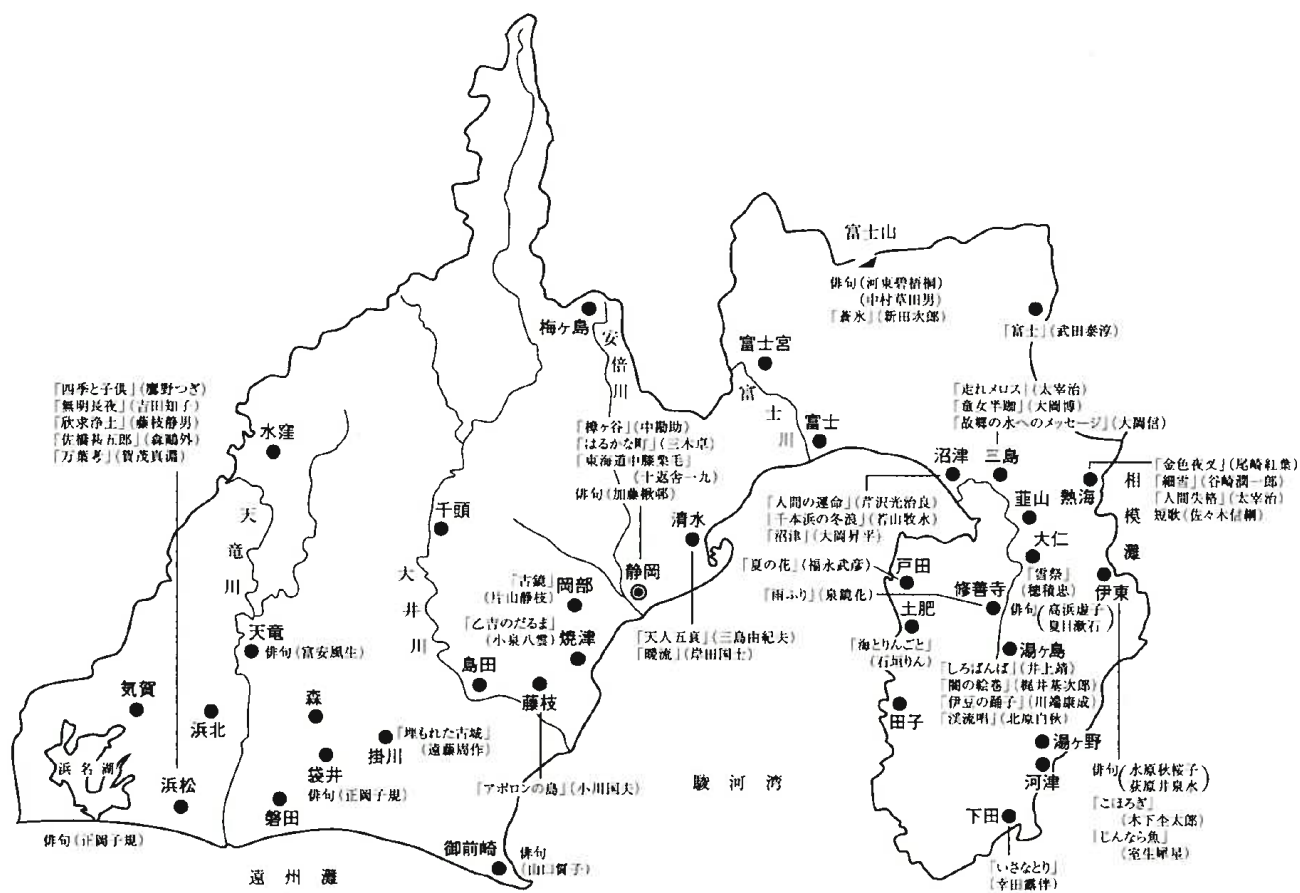
No. *	氏	名	写真 正面・上半身 (4cm×5cm)
	カタカナ読み		
生年月日(西暦)		(歳)	
翻訳課題図書名(小説)		翻訳課題図書名(評論)	
国籍			翻訳言語
現住所		Telephone:	Fax:
連絡先		Telephone:	Fax:
E-mailアドレス			
社会人の場合	勤務先・職務内容等		
学生の場合	学校名・学部学科等		
最終学歴(学校、学部、学科、学位名等を記す)			
翻訳歴			
私は、当コンクールの規定に同意し、その適用に応じます。			
署名			

●*印は記入しないこと。

●翻訳原稿(小説、評論)及び身分を証明する書類(学生証、社員証等の写し)を添付して、事務局まで送付する。

静岡県文学略地図

(近代文学)



**伊豆文学フェスティバル
実行委員会事務局**

〒420-8601 静岡県静岡市追手町9番6号

静岡県教育委員会文化課

TEL (054) 221-3109 FAX (054) 250-2784

ホームページ <http://www1.sphere.ne.jp/shizuoka>

E-mail shizuoka@po.sphere.ne.jp

The Secretariat for the Executive Committee of the Izu Literature Festival

Culture Department

Shizuoka Prefectural Board of Education

9-6, Ōte-machi, Shizuoka-shi, Shizuoka-ken, 420-8601, Japan

Phone: +81-54-221-3109; Fax: +81-54-250-2784

Web: <http://www1.sphere.ne.jp/shizuoka>

E-mail: shizuoka@po.sphere.ne.jp

Das Sekretariat des Planungsausschusses des Izu-Literatur-Festivals

Die Kulturabteilung des Bildungsausschusses der Landesregierung Shizuoka

9-6, Ōte-machi, Shizuoka-shi, Shizuoka-ken, 420-8601, Japan

Tel: +81-54-221-3109; Fax: +81-54-250-2784

Web: <http://www1.sphere.ne.jp/shizuoka>

E-mail: shizuoka@po.sphere.ne.jp